

明日をひらく地域活性化のための情報誌

# 地域づくり

特集 ■ 平成 20 年度  
地域づくり総務大臣表彰

3

2009

1 巻頭エッセー「都市」が地球を救う

秋葉忠利（広島市長）

特集 平成20年度 地域づくり総務大臣表彰

4 平成20年度地域づくり総務大臣表彰

二十五団体の活動と功績をたたえる 個人表彰では四組五人を表彰

団体表彰（計17団体）

- 田んぼdeミュージカル委員会【北海道むかわ町】6 ●NPO法人 ジュニアグローバルトレーニングスクール【青森県青森市】7 ●NPO法人 東鳴子ゆめ会議【宮城県大崎市】8 ●くろほね交流居住支援隊【群馬県桐生市】9 ●日本愛妻家協会【群馬県嬬恋村】10 ●金屋町まちづくり推進協議会【富山県高岡市】11 ●黒川町内会【富山県上市町】12 ●雪だるま倶楽部【石川県白山市】13 ●株式会社 南信州観光公社【長野県飯田市】14 ●NPO法人 生活バス四日市【三重県四日市市】15 ●京都学生祭典実行委員会【京都府京都市】16 ●NPO法人 芸術と計画会議【兵庫県神戸市】17 ●コウノトリ野生復帰推進連絡協議会【兵庫県豊岡市】18 ●有限会社 安達商事【鳥取県江府町】19 ●倉敷市インクルージョン推進事業全体協議会【岡山県倉敷市】20 ●NPO法人 北九州ピオトープ・ネットワーク研究会【福岡県北九州市】21 ●NPO法人つどいの広場いづか【福岡県飯塚市】22

地方自治体表彰（頑張る地方応援表彰）（計8団体）

- 北海道標津町【北海道】27 ●宮城県栗原市【宮城県】28 ●茨城県大子町【茨城県】29 ●群馬県上野村【群馬県】30 ●山梨県北杜市【山梨県】31 ●香川県小豆島町【香川県】32 ●宮崎県【宮崎県】33 ●沖縄県南風原町【沖縄県】34

個人表彰（計4組（5人））

- 皆川トメ子・山内サトミ【福島県昭和村】35 ●羽賀友信【新潟県長岡市】36 ●セーラ・マリ・カミングス【長野県小布施町】37 ●清水義康【滋賀県長浜市】38

レギュラーレポート

地域づくり応援団

39 ムラの生命をマチの暮らしに、マチの活力をムラの生業に”  
九州のムラへ行こう 編集長・九州ムラたび応援団 団長 養父信夫

団体探訪

40 常陸太田まちかど案内人の会 鯨ヶ丘倶楽部  
発掘・発信 まち全体を博物館に

茨城県常陸太田市

全国地域リーダー養成塾

42 高知のアツさを学んだ感動の3日間

石川県加賀市 南出寛人

43 熱い想いもつ4人のリーダーとの出会い

埼玉県加須市 今村伊知朗

44 歴史・文化・ひとの力を感じたまちづくり

千葉県匝瑳市 鈴木美穂

45 首長の思い「藤堂高虎公」 歴史と文化に学ぶまちづくり

松田直久（津市長）

48 センター通信

グラビア

2・23 平成20年度 地域づくり総務大臣表彰

46 都道府県漫遊●兵庫県

47 手前みそですが…●熊本県天草市



野鳥保護区域の伊豆沼



石ノ森章太郎ふるさと記念館



興福寺観音堂



旧登米高等尋常小学校校舎

表紙「米川の水かぶり」

（宮城県登米市）

宮城県北部の登米市東和町で二月六日、「米川の水かぶり」（国指定無形文化財）が行われた。東和町米川に伝わる年中行事で、二月の初午の日に行われる。

地元に住む男性たちが、かまどのすずを頭に塗り、ワラで作った水かぶり装束を身にまとい、大慈寺境内にある秋葉大権現に火伏せを祈願する。その後、男たちは奇声をあげながら町内を練り歩き、家々の前に置かれた桶やバケツの水を屋根に向けてかける。

一行が通りかかると、町内の人々は争って装束のワラを引き抜き、屋根に載せる。これを見ると、火伏せになるとか魔除けになると言い伝えられている。今年は、七十歳の高齢者から三人の小学生まで二十六人が参加した。

江戸の中期には既に行われていたというこの行事が終わると、米どころ登米地区にも春が一步近づく。

●文：原田 ●カメラ：小形又男



屋根に向け水をかける



広島市長 ● 秋葉忠利

## 「都市」が地球を救う

「仮に、連邦政府が地球温暖化についての責任を果さなくても、アメリカ中の都市が協力して温暖化ガスの排出量を削減すれば、結果として、アメリカ合衆国としての責任を果せる。世界中の国が同じことをすれば、都市が地球を救うことになる」

二〇〇四年、広島市で開かれた日米都市サミットで、こう熱っぽく訴えたのは、当時のホノルル市長ジェラミー・ハリスさんだった。その言葉通り、アメリカでは現在まで九百以上の都市が協定を結び、京都議定書で定められたアメリカの目標値、一九九〇年比七%の削減を達成するための都市ごとの目標を掲げて頑張っている。

地球規模の問題解決のために都市が立ち上がっている例はまだまだあるが、広島市にとって特に大切なのは核兵器廃絶についての動きである。広島市と長崎市が一九八二年、核兵器廃絶のため設立した平和市長会議の加盟都市数がここ数年、急激に伸びているが、それは二〇〇三年に平和市長会議が、二〇二〇年までの核兵器廃絶を目標とする「二〇二〇ビジョン」(核兵器廃絶のための緊急行動計画)を掲げ、改めて世界の都市に呼び掛けた結果である。

その過程で私たちが知ったのは、「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」という被爆者たちの哲学が、世界の都市に共有されているという事実である。

人類の歴史は、多くの都市の悲劇の歴史でもあると言っても良いくらい、多くの都市が市民レベルでの悲劇——その多くは戦争によるものだが——を経験し、その記憶を大切にしている。ゲルニカ、イーペル、アウシュビッツ、スターリングラード、ヒロシマ等の名前からこの点についてはお分かりいただけたと思う。

例えば、平和市長会議の理事都市であるベルギーのイーペル市は、第一次世界大戦で、初めて毒ガス兵器によって攻撃され街全体も壊滅した。そのイーペル市では、戦争が終わってから九十年以上経った今でも、毎日、夕方に戦没者のための慰霊式典が続いている。イーペル市のメッセージも「このような悲

劇を繰り返してはならない」である。

冷戦の終了とともに、核兵器の脅威もなくなったという誤った理解が世界に広がったが、私たちは今、ここ数年の内に「核兵器を廃絶するのか」それとも「全て国が核兵器を保有するようになるのか」を決断する重大な岐路に立っている。

例えば、ワシントンポスト紙が昨年報じたように、世界の四十カ国以上が新たな原子力エネルギーの開発を進めようとしており、核兵器開発の意図を持つ国もあるのではないかと懸念されている。

同時に大切なのは、世界の圧倒的に多数の市民ならびに国は核兵器の廃絶を望んでいるという事実である。この多数派の声を国際社会共通の声にし、国連を通してその実現を図るために、平和市長会議は昨年、「ヒロシマ・ナガサキ議定書」を公表し、二〇二〇年までの核兵器廃絶への具体的な道筋を示した。

地球温暖化問題における京都議定書と同様の役割を、核兵器廃絶において「ヒロシマ・ナガサキ議定書」が果せるよう、現在、二〇一〇年の「NPT再検討会議」での採択を目標に、加盟都市やその他の自治体の首長による賛同署名活動や各国政府に理解と協力を求める活動を行っている。

市民の生命と財産を守るため最大限の努力をすることは、都市として最低限の義務であり、最も崇高な責任である。そのために、世界の都市が連帯して取り組むことこそ、核保有国の政策を変え、世界の方向性も変えていくことにつながると信じている。

また、平和市長会議の活動の推進に当たっては、「唯一の被爆国」を標榜するわが国が先導的な役割を果たしていくことも重要だ。そのためには、より多くの国内都市による強固なネットワークの形成が不可欠である。

世界の都市と共に核兵器のない平和な世界を創造するため、皆様の自治体でも、平和市長会議の理念をご理解の上、是非ともご加盟頂きたくお願い申し上げます。

# 平成20年度地域づくり総務大臣表彰



くろほね交流居住支援隊 ●群馬県桐生市 (P9)  
二十日大根の収穫で“はいポーズ”



田んぼ de ミュージカル委員会 ●北海道むかわ町 (P6)  
第三作映画「いい爺イライダー」でお年寄りの暴走族登場



特定非営利活動法人ジュニアグローバルトレーニングスクール  
●青森市 (P7) 日米韓中の4カ国の小学生が集合



日本愛妻家協会 ●群馬県嬬恋村 (P10)  
キャベツ畑の中心で妻に愛を叫ぶイベント



東鳴子ゆめ会議 ●宮城県大崎市 (P8)  
湯治かし



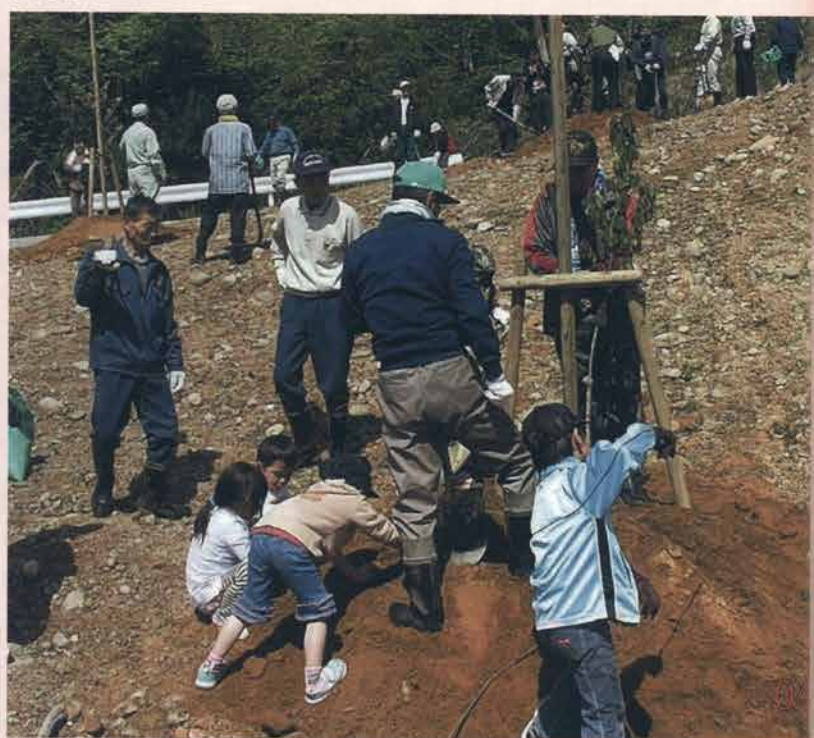
株式会社 南信州観光公社 ●長野県飯田市 (P14)  
学生や生徒たちが農家民泊を体験



金屋町まちづくり推進協議会 ●富山県高岡市 (P11)  
マスコットキャラクターの「利長くん」



NPO 法人生活バス四日市 ●三重県四日市市 (P15)  
自動車を使えない人の移動手段に



黒川町内会 ●富山県上市町 (P12)  
景観づくりのための桜を植樹



雪だるま倶楽部  
●石川県白山市 (P13)  
「雪だるま」にこだわるまちづくり

## 二十五団体の活動と功績をたたえる 個人表彰では四組五人を表彰

地域の個性豊かな発想を活かし、住民をはじめ、さまざまな主体が取り組む、魅力あふれる地域づくりに顕著な功績のあった地域づくり団体、民間企業、地方自治体および個人を表彰する平成二十年度地域づくり総務大臣表彰が十二月二十二日、東京・港区の虎ノ門パストラルホテルで行われた。

今回から、これまで団体表彰に含まれていた地方自治体に対する表彰について、「地方自治体表彰（頑張る地方応援表彰）」として新部門が設けられた。

表彰式は、鳩山邦夫総務大臣が受賞各団体、個人の地域づくり活動の業績や情熱をたたえ、地域人材の育成への期待や、さらなる地域活性化への寄与を願う式辞を述べた後、二十五団体と四組五名の個人に表彰状を授与した。表彰式に際し、アドバイザーである崔洋一監督のコメントを交えた「田んぼdeミュージカル委員会」の新作映像の紹介や、地方自治体表彰を受けた

宮崎県知事のビデオメッセージなど、熱意ある活動発表が行われた。

今回の表彰は、前回（昨年度）の大賞（二団体）、団体表彰（二十五団体）、個人表彰（三人）の計二十六団体、三人の表彰数に比べ、一団体の減、一組二名の増となった。

選定に際しては「この地域ではこれがベストだ」「このような活動がこの地域を良くするのだ」という判断による都道府県からの推薦、地域づくり懇談会構成員からの推薦に基づき審査が行われた。

この表彰の趣旨は「地域をより良くしようとする」団体または個人を表彰するというものである。審査基準は、①他の模範となる先進的な取り組み、ユニークさや創意工夫ある取り組み、地域独自の歴史的・地理的・社会的特性を活かした取り組みなどの先進性・独自性②活動の継続性や効果・実績の定着性③規模の拡大や内容の多様性、他地域への波及性など発展性④自主的・主体的な



## 受賞団体・受賞者一覧

### 団体表彰〈計 17 団体〉

|                                  |           |
|----------------------------------|-----------|
| 田んぼ de ミュージカル委員会                 | 【北海道むかわ町】 |
| 特定非営利活動法人<br>ジュニアグローバルトレーニングスクール | 【青森県青森市】  |
| 特定非営利活動法人 東鳴子ゆめ会議                | 【宮城県大崎市】  |
| くろほね交流居住支援隊                      | 【群馬県桐生市】  |
| 日本愛妻家協会                          | 【群馬県嬬恋村】  |
| 金屋町まちづくり推進協議会                    | 【富山県高岡市】  |
| 黒川町内会                            | 【富山県上市町】  |
| 雪だるま倶楽部                          | 【石川県白山市】  |
| 株式会社 南信州観光公社                     | 【長野県飯田市】  |
| 特定非営利活動法人 生活バス四日市                | 【三重県四日市市】 |
| 京都学生祭典実行委員会                      | 【京都府京都市】  |
| 特定非営利活動法人 芸術と計画会議                | 【兵庫県神戸市】  |
| コウノトリ野生復帰推進連絡協議会                 | 【兵庫県豊岡市】  |
| 有限会社 安達商事                        | 【鳥取県日野町】  |
| 倉敷市インクルージョン推進事業全体協議会             | 【岡山県倉敷市】  |
| 特定非営利活動法人<br>北九州ビオトープ・ネットワーク研究会  | 【福岡県北九州市】 |
| 特定非営利活動法人つどいの広場いづか               | 【福岡県飯塚市】  |

### 地方自治体表彰（頑張る地方応援表彰） 〈計 8 団体〉

|        |         |
|--------|---------|
| 北海道標津町 | 山梨県北杜市  |
| 宮城県栗原市 | 香川県小豆島町 |
| 茨城県大子町 | 宮崎県     |
| 群馬県上野村 | 沖縄県南風原町 |

### 個人表彰〈計 4 組（5 人）〉

|              |           |
|--------------|-----------|
| 皆川トメ子・山内サトミ  | 【福島県昭和村】  |
| 羽賀友信         | 【新潟県長岡市】  |
| セーラ・マリ・カミングス | 【長野県小布施町】 |
| 清水義康         | 【滋賀県長浜市】  |

合計 25 団体、4 組（5 人）

## 団体表彰

取り組み⑤住民と行政の協働性、住民や国、県との連携性⑥住民の満足度、地域の活性化、雇用の創出、新たな地域文化の創造、地域の知名度やイメージ向上などの効果⑦各表彰の種類に関する。地域をより良くしようと尽力した団体を表彰するもので、「地域をより良くする」という言葉には、経済の活性化や伝統文化の維持、国際交流、コミュニティづくりなど、さまざまな解

## 個人部門

地域をより良くしようと頑張る地方自治体を表彰するもので、宮城県栗原市など 8 団体が選定された。

## 地方自治体表彰 （頑張る地方応援表彰）

積がある。予め細かく要件を指定すること避け、現場の実情を踏まえた判断を尊重し、全国十七団体を選出した。

自ら率先し、地域づくりに貢献している宮内トメ子氏、山内サトミ氏ら三組四名が選ばれた。地域づくりに活躍する個人を表彰にすることで、その功績をたたえ、地域づくりのさらなる進展を目指すのが狙いである。

なお、大賞については、全推薦事例の内から特に優れているものに対して授与されるものとしているが、今年度は該当なしとなった。

この表彰を通して、地域づくりへの情熱や想いを高め、豊かで活力ある地域社会の構築が図られるものを期待される。

# わしらの作った映画の自慢

## 出演者平均年齢76歳

「カントク、わしらでも映画つくれるべか」と原田幸一さん（80）が大きな声で聞くと、「できる、できる。どうせ作るなら歌って踊るミュージカル映画を！」と崔洋一映画監督がいつも簡単に言った。

文化講演会でのこんなやり取りが映画づくりのきっかけだった、この話ももうなかば伝説化してきている。

平成十五年（二〇〇三年）の第一作「田んぼdeミュージカル」以来、全国各地の自主上映会や映画祭で上映され、テレビ番組にもなり、映画雑誌やアメリカの週刊誌「ニューズウィーク」にも写真入りで紹介された。

それらのインタビューやゲストトークに招かれて話しているうち



事務局

● 斉藤征義

に、「本当にそんな簡単に取り組んだのかな」と年寄りたちは自問する。「そりゃあ大変な苦闘だったんだから」と苦労話が始まると、しだいに顔が輝きだし、そのまま自慢話になる。

撮影は若い頃からカメラが好



第一作「田んぼdeミュージカル」。  
村人ダンサーズが生き生きと踊る

きだった星勇さん（88）、監督には青年団の頃に芝居をやっていた伊藤好一さん（78）、メイクは娘時代にパーマ屋さんだった高橋安佐子さん（78）ら。第一作の総出演者は百二十五人、平均年齢七十六歳、誰もが映画制作なんて生まれて初めてである。

老体の健康に配慮して役場の保健婦もスタッフに頼み、作曲は町内の音楽好きな教師や役場職員ら、ダンスの振付は保育園の保母さん、衣装や編集に主婦たちも加わり、これら何とも物好きな、個性的な人たちに声をかけて歩いたのがプロデューサー役の原田幸一さんだった。

## 全国的话题呼んだドラマも

「よいい、スタート」のカチンコも崔監督からいただいた。戦争のために結婚式を挙げられなかった老夫婦の物語が第一作。水田を広げ献上米に選ばれるほど米づくりに挺身してきた父と減反でメロン栽培に転換していく息子との対立を描いたドラマの笑いと涙が、全国的な話題を呼んだ。「地方の時代映画祭」の部門奨励賞や多くの賞をいただいた。

第二作は稲刈りの終えた田んぼに大ステージを設け、ファッションショーを開催するまでのドキユメ

ントドラマ「田んぼdeファッションショー」。20パターンの仕事着や日常着を新作し、プロのモデルさんの指導も受け、フランス語で「ラ・リズィエール」（「田んぼ」の意）とブランドにして高橋はるみ北海道知事にも特別出演願った。すべて高齢者向けのユニバーサルファッションである。

三作目は年寄りたちがオートバイで「市町村合併反対」を叫び、隣町の若者たちと抗争、町議会へも乗り込む「いい爺いライダー」。どれもが体験をふまえた「わしらとまちの記録である。六年間で三作品。公開はいずれも札幌の劇場がスタート。

商業映画のエキストラにも指名されて、年寄りたちはすっかり映画の魅力にとりつかれた。

むかわ町穂別地区は、合併前の旧穂別町で人口約四千人、高齢者比率二六%の山奥の小さな町である。「地域づくりを目的に映画をしたんじゃない」と年寄りたちは言う。「面白くてやってみるうちに、人の交流や老人の笑顔を取り戻したんだ。映画は永久に残るから、新しい伝説づくりのようなもんだ」

ちょっとオシャレになって背筋をのばし、次回作への意欲に笑顔がはち切れそうである。

# 種を蒔き、 花が咲いて、 人を育む



理事長 ● 工藤 健

「ジュニアグローバルトレーニングスクール」は毎年、夏休みを利用して、日本・米国・韓国・中国の小学生約百二十人を対象に、二泊三日の国際交流スクールを開催している。

スタートは青森青年会議所の青少年育成事業であり、平成九年（一九九七年）に外部ボランティアとの実行委員会となり、平成十五年から独立した任意団体として活動、十九年三月にNPO法人となった。

活動の柱は、①地球市民ジュニアとしての小学生の国際交流体験②運営を支える高校生・大学生によるボランティア・国際交流体験③諸外国との草の根レベルの国際交流・国際協力であり、その目的は①国際交流と国際協力②子供たちの健全育成と社会教育の推進③地域に根ざしたまちづくりである。



米国・韓国・中国の小学生が集合

青森市から車で一時間程の三沢米軍基地との交流が発端となった。青森空港の韓国・ソウル便就航、ロシア・ハバロフスク便の就航に合わせ、子供たちの交流の幅が広がり、昨年からロシアに代わり中国・大連市

の子供たちが加わった。

スクールは二泊三日だが、ボランティアを中心とした企画運営会議が毎年四月から本番の八月まで十回ほど開かれる。運営を支える約八十人のボランティアは多くが高校生・大学生である。

子供たちのコミュニケーションを担当する通訳は、チャレンジ精神旺盛な高校生・大学生のほかに、アジア各国からの留学生だ。

## 市民ボランティアは年々拡大

そのほかに、企業や団体の有形無形の協力や協賛、そしてPTA・一般市民のボランティア参加は年を追うごとに広まりつつある。

例えば、食事のメニューの一つ、二百食のカレーライスは、米穀店が米を協賛、中華飯店の業務用の釜でご飯を炊き、ルーはPTAや子供たちの保護者が作る。医薬品の提供や緊急時の携帯電話の連絡体制など、医師の協力もある。

さらに飲料会社からの冷水器提供や、移動のため幼稚園が自前のバスをチャーターするなど、多くの方々の好意と応援を受けて事業は行われている。また、行政も各国との窓口となつてサポートするなどスムーズな連携によりスクールの運営を後押



子供たちの交流の輪が広がる

しする。

この活動の「種」は、子供たちの間に確実に蒔かれている。小学生で参加した子供たちが高校生・大学生になつて再びボランティアとして参加するケースも多く、社会人となつて関わり続けることも珍しくない。現在のNPOの理事には高校生から参加している人間も数人含まれている。

国際交流は、政治を含めた様々な要因に左右されることもあるが、その現実を超えて強さと理想を持ち続けることが可能な活動でもある。

そこで学ぶのは驚きや発見とともに「理解」と思いやりであり、「じゃあね、いつかまた」と別れる時に抱く「希望」でもある。そして、その活動を支え、ともに希望を生み出すのは、間違いなく子供たちを育む地域の力だ。

# 田んぼ湯治に集約された 地域づくり



理事長

● 大沼伸治

## 高橋さんの掛け声で始まった

平成十五年（二〇〇三年）に東鳴子ゆめ会議を発足させ、数々の取り組みをしてきた。あつという間の五年半だが、その年月の中身の濃さはそれ以上過ぎたように思える。

昨年の暮れ、「平成二十年度地域づくり総務大臣賞」の表彰式に出席した。そのわずか一週間後に、今回の受賞の原動力となった取り組みである「田んぼ湯治」を五年にわたって指導してくださった地元農家の高橋耕司さんが急逝した。

享年七十九歳。あまりの急な訃報に訃報に、関係者は正月気分も吹っ飛び、皆一様に肩を落とした。細い身体に似つかわしくないほどがっしりした手には、その苦勞の年月が刻まれていた。

昨年十一月、「田んぼ湯治」の収穫祭が行われた。「田んぼ湯治」でとれた米で餅つきを行う恒例行事である。高橋さんの訃報に接した「田んぼ湯治」の参加者は、真つ先に笑顔で新米の餅をつく高橋さんの姿を思い浮かべたに違いない。

田仕事で汗を流し、農家で手作りのお昼をいただき、近くの温泉で汗を流す「田んぼ湯治」は、平成十六年、農家の高橋さんから声がかかり、たまたま宿泊していた湯治客二人を誘い、たった五人から始まった取り組みである。

今でこそ、グリーンツーリズム全国大会の誘致や鳴子の米プロジェクトといった「農」分野の活躍がめざましい鳴子温泉郷だが、高橋さんと

「田んぼ湯治」を始めたころは、まだ農との連携は皆無に近かった。

その後「田んぼ湯治」はNHKのテレビ番組「ご近所の底力」に、お悩み温泉地の解決策として登場したのを皮切りに、数々のメディアに出る名物イベントとなった。大臣賞の原動力になったのもこの「田んぼ湯治」に負うところが大きい。

取材のたび、高橋さんは同じことを繰り返して説いた。「せっかく温泉に来てもらうのだから、『食』を担う農業も体験して欲しい」

さらに、旅館などに向けても、「旅館、農業と分けて考えるのではなく、



子供からお年寄りまで一緒に、田仕事に精を出す

一つになってお客さまに喜んでもらうことをやるべきだ」と。

今思えば、私どもの地域づくりはこの「田んぼ湯治」にすべてが集約されていたような気がする。それは、お互いの垣根を越えて一つになり、ともに汗をかくこと。そして感謝する、ということである。今こそ、高橋さんが私たちに身をもって教えてくれたことを実践すべき時である。

## 今年は新たに「大豆湯治」を

昨年、「田んぼ湯治」の参加費から少しずつ積み立てた予算を使いのかしの看板を立てた。主人を失ったかかしは困惑し、泣いているようでもある。五年間続いた「田んぼ湯治」は余人をもって代え難く、残念ながら昨年で終了することになる。

今年からは、仲間の宿がやっているクラインガルテンの畑を借り、東京で活動する志を同じくする仲間と「大豆湯治」を始める予定だ。高橋さんが全身全霊を込めて行った、「農業の立場からの垣根はずし」が日本の地域づくりに与えた影響は計り知れない。

彼の意志をどれだけ継いでゆけるかわからないが、常に心の奥底に据え時代を乗り切ってゆきたい。

## くろほね交流居住支援隊

## 移住希望者を

## 町ぐるみで支援します



隊長

● 斉藤都繁

桐生市黒保根地区（旧黒保根村）は、桐生市との合併以前から、過疎対策事業の一環として、先駆的に定住促進事業を実施しており、宅地分譲事業（ひまわり団地）や移住者に対して奨励金を交付する「定住促進条例」などの政策は合併後も継承している。

この定住促進事業をより効果的、戦略的に推進するため、黒保根地区の市民団体の集合体として「くろほね交流居住支援隊」（隊員三十五人）を平成十八年に結成し、黒保根地区への交流人口の増加を目指す取り組みがスタートした。

「食」をテーマに  
ミステリーツアー

「くろほね交流居住支援隊」が開催したイベントを一つご紹介しよう。平成十九年十月、移住希望者を参加対象とするイベント「突撃！黒

保根のミステリー晩ご飯」と銘打って実施した。

午前中は、黒保根地区を三コースに分け、農地を探索し、食材をゲット。午後はゲットした食材により、「くろほね風幕の内弁当」を夕食用のお持ち帰り弁当として、黒保根地区の食生活改善委員会の皆さんが中心になり調理した。

調理する間に交流会として、桐生市の紹介や移住相談会、焼き芋づくり体験やもちろし団子づくりなどを実施。食材もレシピもプログラムも参加しなければ分からない、というミステ



家路につくまでわからないミステリー弁当

リーツアー。お弁当の食材は、ほぼ一〇〇％黒保根産。生産者の顔が分かって、自分で収穫したから安全・安心。田舎生活を農家との交流をとおして体験できる内容だった。

参加者は三十人。うち、十五人が東京、千葉、神奈川からの参加者だった。イベント後の反応は、農家へ感謝の手紙をいただいたり、空き家や農地を求めて問い合わせ等も受け、地域住民が人を迎え入れる喜びを感じたイベントとなった。

## 黒保根で夢を実現してほしい！

イベント開催の他にも、地域内の空き家情報の収集や先輩移住者を紹介し、移住希望者の道しるべとなるよう「HOW TO くろほね移住」という小冊子の発行なども行い、これらの活動から、平成二十年には支援隊発足後三年目にして成果が表

れ、四世帯十二人に首都圏から移住していただいた。

移住とは生活環境・人生の大変革であり、容易なことではないが、この支援隊を中心に地域住民が移住希望者を受け入れる素地はできつつあると感じている。

黒保根地区には、イターン者が多く居住している。

これまで移住されてきた方は、団塊の世代が中心ではなく、意外かもしれないが三十歳〜四十歳代の働き盛りの方も多く移住してきている。目的は、新規就農や花卉栽培、レストラン経営、キャンプ場経営など、都会では成し得なかった「夢」を実現している。

また、高齢者や障害を持つ人など交通弱者のために、タクシー料金の半額以下で外出支援サービスを行う NPO 法人の設立、町会長や市議会議員になった人もいる。まさに地域のリーダー的存在だ。

移住される方は、より明確な目的をもって生活している。地元住民より、地域の問題や魅力を敏感に意識する「感性」があるように思う。長く居住していると、地域の魅力を当たり前に感じ、問題意識が薄れてしまう。

しかし、移住者の働きかけにより、先住者に潜在していた感性を掘り起こし、行動に結びつけている。黒保根地区では、移住者が中心になって、今までなかった市民活動も活発になっている。移住希望者への支援体制として、「くろほね交流居住支援隊」が行政と協働して、誠心誠意、移住相談にお答えしています。

あなたの「夢」を、黒保根で実現しませんか！あなたが主役です！

# 愛妻家が増えれば 世の中穏やかになる



事務局長

● 山名清隆

愛妻家協会と聞くと、愛妻家が集まっていると思われるが、必ずしもそういうわけではありません。基本的には、愛妻家を研究する会です。私たちにとって、愛妻家とはめったに見かけないナゾの「未確認生物」という設定です。

そのベールに包まれ、いまだ生態が解明されない愛妻家。それはどうしたらそうなるか、どうしたらそうならないのかを調べて楽しむ活動です。いわゆる雪男とかツチノコの研究と同じですね。メンバーの中にはちらほらと愛妻家とおぼしき人物も混じっているが、定かではありません。

## 中高年男性が続々とエール

「妻というもつとも身近な赤の他人を大切にすると、世界



照れながらも大声で呼ぶ

はもう少し豊かで平和になるかもしれない」というのが、私たちのビジョンです。愛妻家である人が増えたら、世の中がもう少し穏やかで柔らかな感じになるのではないかとイメージしたわけです。そうしたら意外なことに、全国各地の中高年男性の方々から熱いエールが続々と集まりました。

「いままで仕事のことだけで奥さんの気持ちを考えたことがなかった」「謝りたーい」「感謝を伝えたい」とか、「今でも好きだと言いたーい」とおっしゃる素直な方々のネットワークがあつたという間に生まれた、という感じですね。

嬭恋村。なんと素敵な響きでしょう。「妻が恋しい」と素直に言える男たちがたくさん住んでいる感じがします。村を訪れた旅人は手をつないで歩く幸せそうな老夫婦の多さに驚きます。

世界各地に生息するに愛妻家的生命体が年に一度集まる場所が日本の嬭恋村にあるらしい……。というようなイメージをしてみたことが愛妻家協会の始まりです。

嬭恋村の名前の由来は、かつて妻の計報を聞いた日本武尊が、悲しみに耐えかねてひと目はばからず空に向かつて「我妻恋し」と三度叫んだという言い伝えから来ています。

千九百年前に一人の男が心の底から妻が恋しいと叫んだことは、今も私たちの心に何かを響かせているのです。

## キャベツ畑の中心で

### 妻に愛を叫ぶ

キャベツチュー（正式名称…キャベツ畑の中心で妻に愛を叫ぶ）と名



口に出せなかった妻への思いを…

づけたイベントでは、名もなき男たちが口に出せなかった妻への思いをもってその丘にやってきました。照れながら、ありったけの声で叫ぶだけのことですが、毎回魔法のような出来事が起こります。

奥さんの手料理を褒めたり、初めて名前を呼んだり、ラブレターを渡したり。あたりの空気が穏やかで、すがすがしく幸福な空間に変わります。涙があふれたり、笑いあったりしているうちに何もないキャベツ畑が生き生きとした場所に変わりま

す。どうも毎回、そういう感じになるのは、日本武尊が叫んだとされる山のかもとでやっているからかなあ、と感じ始めています。

## 金屋町まちづくり推進協議会

高岡市

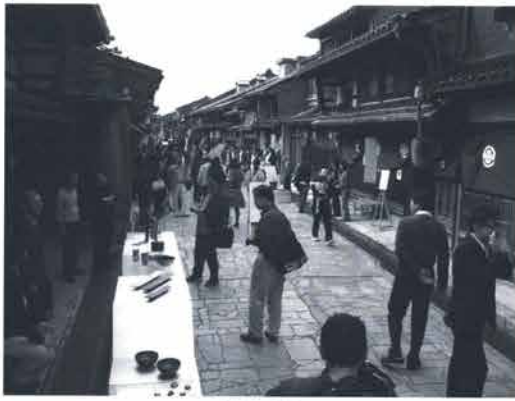
## ものづくりの町から

## 世界へ発信



女性部会長 ● 般若陽子

高岡市は富山県の西部に位置し、今年が開町四百年という節目の年である。加賀藩二代目前田利長公が、その藩主の座を三代目利常公に譲り、高岡の地に築城して入城されたのが、一六〇九年九月十三日である。金屋町は一六二一年、利長公が日本鋳物の発祥の地と言われている河



金屋町楽市

内丹南（現堺市美原区）の流れをくむ勅許鋳物師七人を招聴して、手厚い保護のもと千保川左岸に住ませたのが起りである。以来、金屋町の鋳物産業は、鉄鋳物から美術銅器、そして近代アルミ産業へと発展してきた高岡の地場産業の根幹となってきた。

利長公は、高岡の地で入城から五年後の六月（旧暦五月）二十日に亡くなった。この御命日に、金屋町ではその遺徳を偲び、報恩感謝し、地場産業の発展を祈念して「御印祭」という祭りを開催している。

十九日の前夜祭では、地区の住民や民謡愛好者千人以上の参加による弥栄節の踊りの街流しが行われた。この民謡は、鋳物の工程で「たたらぶき」の辛苦の中から生まれた作業唄である。

また、金屋町まちづくり推進協議会では、御印祭のプレイベントとして、地場産業の活性化、そして何よりも住民がこの町を愛し誇りを持ち、歴史や伝統を次世代に継承してゆくことを目的に、平成十三年から「さまのこフェスタ in 金屋町」を開催してきた。

「さまのこ」とは、高岡の方言で千本格子のことであり、金屋町には、築八十～二百年のさまのこの町家が多く残っている。この町家に、地元の人間国宝・伝統工芸作家の作品、美術品、銅器、絵画などアートを飾る。

普段、生活しているため入ることのできない町家は、訪れる人には好評であり、お茶会、物販などの「おもてなし」も盛況に行っている。全ての企画運営を地区住民だけで始めたこともあり、メディアもこれを大きく取り上げ、以来八年間継続してきた。

## 富山大の発案で楽市も開催

「継続は力なり」と言うが、企画運営が絶えず進化しないとマンネリになるし、また飽きられてしまう。こうした中で、日ごろから交流のあった富山大学芸術文化学部が発案で、平成二十年十月二十五～二十六

日に「金屋町楽市」を開催した。

これは「日本のものづくりの技を世界に発信しよう！」を目的に、国際的に活躍している隈研吾氏がデザインし、新たに開発されたアルミブロックの組み合わせをメインに、北陸三県のものづくりの作家や大学関係者、鋳物関係の若い職人などの作品を展示し、石畳み通りと町家をゾーンミュージアムとした。

「さまのこ」と石畳みの続く鋳物発祥の町と現代アートのコラボレーションは、新しい地域活性化の一つのモデルとなった。これは、地域住民主体のイベントではなく、しっかりとしたコンセプトによりデザインされた一種の芸術だと思っている。より「ほんもの」を地域の中で具現化できることは素晴らしいことである。

「産・学・官・地域」の連携・協力による効果は非常に大きなものであった。このことは、大学関係者によりパリの学会でも紹介され、産業界でも大いに期待されている。

開町四百年の今年、マスコミキャラクターの「利長くん」とともに大いに燃えたい、と思っている。今後も二〇〇〇年より続く「交流視察」や「金屋学講座」など地域の連携、情報発信に努めていきたい。

## 黒川町内会

地域の宝物を活かし  
「名水と歴史の郷」づくり

町内会長

● 笹野信之

富山県上市町は、北アルプスの名峰・剣岳の麓に位置し、水と緑に恵まれたまちである。当町内会がある黒川地区は、昭和二十八年の合併により上市町となった旧山加積村の一部である。人口は緩やかに減少し、年齢構成も高齢化が徐々に進むものの、従来から住民の結束が強く積極的な自治活動を行ってきた。

## 町内会を核に

## 里山づくりの組織

地区内には、全国名水百選に選ばれた「穴の谷の霊水」や平成十八年一月に国指定史跡に指定された「上市黒川遺跡群」を擁している。黒川町内会の活動として、一般の生活互助を中心とした活動のほか、町内会が母体となった複数の組織を結成し、年間を通じ様々な形で周辺の環境保全や地域の伝統を守り育てる活



炭焼き体験事業

動などを繰り広げている。一つ目は、「穴の谷駐車場管理組合」の活動である。

名水で知られる「穴の谷の霊水」は、年間を通して多くの方が訪れる名所となっている。この名所の保存管理と活用を目的に、昭和五十九年に同組合を設立した。駐車場や休憩

施設等の管理や美化活動による周辺環境の整備を行いながら、地元産の農産物直販所を運営している。

二つ目は「黒川桜の森づくりの会」である。

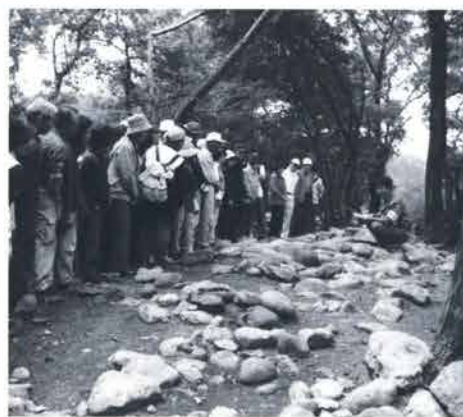
これは、穴の谷の霊水に至る沿道や遊休地の活用と景観づくりのために桜を植樹し、山里を「桜の森」として一体的に整備したいとの思いで、平成十八年に会を設立し、始まった活動である。実際に花木を楽しむまでには相当な時間を要するが、地道にそして計画的に取り組んで行きたいと考えている。

三つ目は「グリーンツーリズム推進協議会」である。

これは、地元にある間伐材などの豊富な資源を活用し、地域外の方々とも交流を図りたいということで、平成十九年に設立したものである。まず手始めに、炭焼き窯「はなおか窯」を完成させ、炭焼きの体験事業を核に交流事業を進めている。

## キーワードは「歴史・文化」

国指定史跡である「上市黒川遺跡群」は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての遺跡群である。この遺跡群の発掘により、黒川地区が立山信仰につながる霊場として栄えた場所であることがわかった。



黒川フェスティバル史跡見学会

町内会では、この歴史資源を広く内外の方々に知ってもらうため、そして地元黒川地区への愛着を醸成するため、地元の子供たちと一緒に史跡などを探索する「歩こう会」を平成十年から毎年実施している。

さらに平成十三年からは「黒川フェスティバル」を毎年開催し、史跡の見学会や講演会、地域の伝統芸能を披露するほか、霊水やグリーンツーリズム推進事業をPRし、地域内外の人たちと交流を図っている。

地域資源を住民自らが見つけて活用し、地元の誇りを住民一丸となつて内外に発信する。そして、子どもからお年寄りまで、すべての住民が活動に参画し、地域の自然や歴史にふれあう。当町内会の取り組みは「地域の宝物を活かしたコミュニティづくり」である。

# 「雪だるま」にこだわる まちづくり戦略



副代表 ● 山下浩雅

石川県の南部、福井県との県境に位置する白山市白峰地区（旧白峰村）は、平成十七年二月、一市二町五村の合併により白山市となった。地区面積の半分以上が白山国立公園区域に指定されており、国内有数の豪雪地帯として知られている。

過疎化が進展する白峰地区において、活性化に向けて地域の若者が立ち上がり、住民総参加のもとで開催された「雪だるままつり」が村おこしのスタートである。

その若者たちを中心として、その後、雪だるま倶楽部が組織され、第二の村おこしとして、平成十九年から古民家再生を進める「雪だるまカフェ」を開設している。

活性化の息吹は、地域の中で飛び抜けた人材の存在である。バカ者・若者・よそ者とは、よく言われるこ

とであるが、大きな夢を抱いて、がむしゃらに走るリーダーがいないと、創造性あるまちづくりはなかなか実現できないのではないだろうか。

## イベント通じ地域に団結力

雪だるままつりや雪だるまカフェの成功の秘訣は、まさに「人」の存在であることに間違いない。

地域の最高の資源である雪を活用し、住民総参加・素朴・手づくりという基本理念の基で雪だるままつりを開催しているが、今では一万人以上の観光客が訪れ、石川県の代表的な冬のイベントにまで成長している。

「住民一人につき一個作ろう」を合言葉に、人口約千人のところ毎年二千個を超える雪だるまが誕生

し、まさに地区内が「雪だるま公園」に変身する。また、ロウソクの明かりを灯すと、幻想的な雰囲気がいっぱい、雪だるまの各々の表情とともに、この明かりがイベントの至極の人気となっている。

このまつりを行うことにより、経済効果はもちろんイメージアップ、地域の協働性や団結力など、生まれた効果は計り知れない。

## 重要伝建群への布石 古民家再生の雪だるまカフェ

同様に、最高の資源である伝統的街並みを背景に、取り壊しの危機にあった明治時代初期建築と推定される古民家を再生した活動は、国指定重要伝統的建造物群を視野に、地域特有の歴史を活かした先駆的な取り組みと言える。



住民総参加雪だるままつり



古民家再生・雪だるまカフェ

また、雪だるままつりに続き、「雪だるま」へのこだわりは、まちづくりの戦略として、住民のＣＩ（コミュニティ・アイデンティティ）の醸成につながっている。

雪だるまカフェは単なる飲食の提供ばかりでなく、いま守っていかねければ、近い将来に廃れてしまうとされるふるさと文化、例えば、食文化、方言・民話、昔のまつりなどの伝承活動にも力を入れている。

その手法として、各分野で県内の大学と連携し、学生らのまちづくり参画を促進しているが、地域活性化に向け調査研究や実践活動を進めることで、相互に大きな成果を上げている。

# 本物の体験へのこだわりが生んだ地域連携



専務取締役 ● 高橋 充

## 農家のホームステイに

年間1万人超が参加

南信州は中央・南阿ルプスの間に天竜川が流れる巨大な谷である。気候は信州地方では最も温暖で、ここに住む人々の気質はとても穏やかである。当地域で、平成八年より飯田市商工観光課観光係が中心となり、体験教育旅行の受け入れに取り組み、平成十三年に当社が設立された。

受け入れ地域は飯田市から下伊那郡全域に広がり、現在年間百十を超える学生団体を受け入れている。

体験プログラムには自然、環境、農林業、味覚、伝統工芸、ボランティア、アウトドアアクティビティ、野外活動、ウィンタースポーツなど様々な分野があり、種目は百六十五種目を数える。公社は体験プログラムの手配・コーディネート・精算の一

切を請け負う窓口として、その責務を果たすべく活動している。

我々の基本的な理念は、地域に暮らす人々の生業や、ありのままの暮らしの中に直接飛び込んで、援助や指導を受けながら利用者と受入者が体験を共にし、その体験交流を通して互いに感動し、高まり、そして人間関係の構築の好機となるものが本物の体験である、ということである。



酪農家体験

体験プログラムの中でも最も利用の多い農家へのホームステイは、南信州の十五市町村・二十九ブロックに暮らす四百五十軒を超える協力農家の方々に支えられ、現在年間七十校、約一万五百人を受け入れている。一般家庭に入るので様々な制約はあるが、現在の若者達に不足しがちな人間関係構築能力を高めるには絶好のプログラムである。

受け入れの基本方針は、あくまでも普段通りのことを行い、特別なことはせず、ありのままの生活に入るということだ。この原則を、農家はもちろん、学校側にもきちんと伝えることで、その効果は一層高まる。

## 体験プログラム通じ 広がる地域内の連携

当社が設立された二〇〇一年当初は受け入れ農家が四地区七十軒程度だったが、同年春に前年の四倍の二十校を受け入れたことで、一カ月半で十六地区、二百五十軒に増えた。このことは単に受け入れ地域が広がっただけでなく、後に公社と受け入れ農家の間に入り調整を行う「地域コーディネーター」が自然発生的に生まれることにつながった。

その他の分野では、乗馬牧場の理解と協力で、単なる引き馬に留まらない本格的な乗馬の体験を行っている。



棚田での田植え体験

るほか、ラフティングや溪流釣り、マウンテンバイクなどは地元設立の会社やNPOが担っている。また、そば打ちや五平餅などの味覚体験では、地域興しグループや地元農家のご婦人たちが主体の、特産品加工グループが担い手となっている。

経営は設立以来、補助金を受けずに独立採算で行い、四年目から単年度の収支が黒字に転換した。多くの学生を受け入れることは日本や世界の将来を担う若者たちの教育にも貢献することであり、責任は大きい。

数多くの地域の人々に協力を得ることは、地域イメージを損なうことが許されない厳しさがある。しかし、そのことを大いなる喜びと捉え、これからも取り組んでいきたいと考えている。

## NPO法人生活バス四日市

地域で育て進化する  
「生活バスよっかいち」

理事長 ● 西脇良孝

四日市市は三重県の中核的な都市であり、人口は三十一万四千一人（平成二十年八月現在）。「年金で豊かに暮らせる日本の町ガイド」でベスト5にランクされた住みよい町だ。私たちが住む羽津地区は、市の北部に位置し、人口約一万六千人。伊勢湾と鈴鹿山脈に抱かれた地域である。

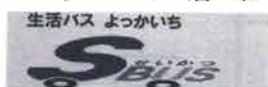
NPO法人「生活バス四日市」はこの羽津地区で、自動車を使えない人の移動手段を確保し、地域活性化と福祉の増進のため、平成十五年四月からコミュニティバスを運営している。

バスは三十九人乗り。月曜～金曜の五日間、スーパーサンシ大矢知店と近鉄かすみがうら駅間（九・六キロ）を一日五・五往復している。

NPO法人がバスを運営するようになったのは、以下の理由からだ。戦後、垂坂地区から羽津いかるが

地区を経由して、近鉄四日市駅まで運行されていた路線バスが、高度経済成長とともに、利用率低下に見舞われ、赤字路線となった。市郊外に病院やショッピングセンターなどできたほか自家用車が普及したためだ。

さらに平成十二年の規制緩和により、バス路線の廃止が簡単にできるようになり、垂坂地区～近鉄四日市駅間の路線バスは十四年五月末で廃線となった。



生活バスよっかいち 路線図 平成19年5月1日改正



「生活バスよっかいち」の路線網

その解決策として、地域住民主体のバス運行が始まったのである。

羽津いかるが地区では近鉄や他のバス路線に行くまで二～三キロしかかるため、高齢者などから不満の声が強かった。アンケートでは「病院や買い物に行く足がなくなるのは困る」という意見が大半を占めた。

「バスに乗りたくない」という要望があるのにバスに乗らない理由は、バス路線は直線的でバス停まで行く距離が遠かったり、バス停の間隔が広すぎたりと、バスを利用しにくい状況にあったことが分かった。

## NPOが運営する

## 路線バス誕生

行政に対し、存続や他の輸送方法をお願いしても、良い方策がなかったことから、地域住民主体のバス運行実現について方策を検討した。

その結果、利用しやすいバス路線を設定し、その路線沿線の事業者や病院・商店にお願いし、月極めの協賛金と行政からの補助金と乗車運賃でバス運行することになった。

住民・民間事業者・運行事業者・行政の協働によって、全国で初めて住民主体のNPOが運営する路線バスが誕生したのである。

バス乗車は有料としたので、路線免許が必要で、単なる市民グルー



「生活バスよっかいち」を利用するお年寄り

プでは取得は難しかった。また、行政より補助金を受けるにしても単なる市民グループでは難しいことも分かった。

その解決手段がNPO法人化で、行政からの補助金、陸運局からバス路線免許を取得できた。

バス運賃は一回百円だが、利用しやすくするために回数券、一カ月乗り放題の応援券（一カ月1千円）がある。応援券は電話で予約してもらい、月末に宅配している。利用者の要望により平成十九年五月以降、路線延長とバス停を従来の二十一カ所から三十一カ所に増やし、利便性を向上させた。

バス新路線の試験運行から七年目となり、バス路線利用者は以前の一、二平均二十五～三十人から、現在では百人超まで増えた。特に高齢者からは、家族に気兼ねなく通院や買い物に行ける、と喜ばれている。

# 「学生のまち・京都」を 学生パワーで活性化



第六回実行委員長 ● 村井杏侑美

京都では、人口の一割に当たる約十四万人の学生が学んでいる。この「学生のまち・京都」を学生のパワーでさらに活性化することを目的として、平成十五年（二〇〇三年）に京都学生祭典が誕生した。毎年十月に平安神宮・岡崎周辺や京都駅ビルなどを会場として開催しており、平成二十年十月には第六回を迎えた。

京都学生祭典は、企画から営業、警備、広報などすべての運営を大学の枠を超えた学生によって構成する京都学生祭典実行委員会が中心となつて行う。営業活動においては数千万円規模の企業協賛の獲得まで学生が行っている。

また、産学公地域から組織された、京都学生祭典組織委員会や京都学生祭典企画検討委員会がこの祭りを一体となつてサポートしている。こう



京都ならではの生活の知恵「打ち水」を実施

いった「学生のまち・京都」ならではの支援体制によって京都学生祭典は成り立っている。

祭典当日は、全国学生音楽コンテストや全国おどりコンテスト、縁日、来場者参加型の企画など多様な取り組みが展開され、大学生をはじめとして、様々な年代の方が参加する。近年では、家族連れや地域のお年寄

りの方も目立ってきており、京都学生祭典は二十万人以上の来場者を集める祭へと成長してきた。

## 年間を通じた地域交流で「祭りの輪」が広がる

京都学生祭典実行委員会では、本来の目的「京都の活性化」を達成するために次の二点に重点を置いて取り組んでいる。一点目は、祭典当日に「学生パワーを発信」することで来場者の方々に楽しんでもいただくこと。二点目は、年間を通じた活動の中での地域交流の実施である。

学生祭典の準備は一年間を通して行う。この祭りが本場に京都のまちに根付いて京都のまちを活性化させるには、地域の方に愛される祭にしなければならぬ。そのために、地域交流活動を何よりも大切に行っている。

地域交流活動としてまず挙げられるのが、京都学生祭典オリジナルおどり「京炎そでふれ!」の披露や、出前教室を通じた地域・世代間交流である。小学校や地域ふれあい祭などで年間四百回以上の交流を行っている。

また毎月一回、平安神宮周辺の岡崎地域の方と協力して行う夜間パトリールでの地域の防犯・防災への貢献や、「京都ならではの」の伝統的な生活の知恵である打ち水を地域の方の指導のもと実施することで、環境に



小学校での「京炎 そでふれ!」出前教室

やさしい京都文化の発信を行った。

平成十九年に製作した「京炎みこし」は、西陣の方に織り方を教えてもらいながら学生が制作した西陣織で装飾されている。地域の中で学生が学び、祭の輪を広げていく中で、京都の活性化に向けた活動を日々実践している。

## 第四の京都の伝統祭を目指す

今後は、この京都学生祭典を京都の三大祭である葵祭、祇園祭、時代祭につづく第四の伝統祭とすべく取り組んでいきたいと考えている。

そのためには、これからも地域交流を大切にして、地元の方から愛される祭、誰もが参加して楽しめる祭にしていきたい。さらには京都だけでなくどまらずこの祭の輪を日本中、ひいては世界に発信していきたい。

ぜひ、今年の十月は京都にお越しいただき、京都の学生のパワー、まちのパワーを感じてほしい。

## NPO法人 芸術と計画会議 (CAP)

神戸市

## 地域の魅力支える

## 芸術家の輪



CAPディレクター

● 下田展久

平成六年（一九九四年）、神戸市の美術館構想に対し、地域の現代美術家十一人が集まって「これからの美術館」という提案書を作り、「美術館」の当事者である美術家の考えを提案した。その後も十一人は自分たちの活動である芸術と社会の関係について「何かがおかしい。自分たちに何ができるのか？」という話し合いを続けた。

翌年、阪神淡路大震災が発生し、美術館構想は消滅。しかし、彼らは次に震災の復旧工事がはじまったまちを美術館にする構想「旧居留地ミュージアム構想」を提案した。こうして芸術と計画会議（CAP）は生まれた。

## 震災後、フランス人の活動が火付け役に

震災直後、フランスの芸術家が神

戸の芸術家に連帯を示す活動をはじめた。マルセイユで二カ月にわたる義援イベント ActeKobe

が行われた。この活動にどう応えるべきか、神戸で様々な分野の芸術家が集まり話し合った。

音楽家、美術家、ダンサーなど初めて顔を合わせる者同士も多かった。CAPの周囲にさらに多様な芸術家の輪が広がった。そして自分たちが「地域の芸術家」だということに気がついた。義援金は市民と交流するイベントに活用された。

社会と芸術について話合う場をもち、一緒に楽しもうというこのパーティーには多くの人が集まり、久々



ダンボールでフラードームを作る子供講座

に笑顔をとりもどす機会となった。以後、こうした催しをキャバティと名付け何度も実施した。

一九九九年、老朽化し放置されていた旧神戸移住センターを市から借り受け、活動を行った。いつも話合ってきたことを実験する試みだ。市民とともに百人余りで掃除をすることからはじめたこの活動を、CAP HOUSEと名付けた。いくつもあつた小さな部屋はアトリエになった。

そこで活動を公開する芸術家を

中心に、ギャラリーができ、ワークショップが実施され、集まり出した地域の人たち、遠方からの見学者、子ども、外国人など、様々な人が交流する場としてカフェができた。

こうした活動の結果、市からセンターの運営を委託され、CAPは二〇〇二年に法人となった。

子どもの芸術講座やアートフェアをはじめ、芸術を媒介に様々な事業を行った。メンバーは四十人を超え、芸術家のコミュニティが生まれ、CAP HOUSEを中心に芸術を愛好する人たちの輪が広がった。

## 社会とのより良い関係を模索

フランス、フィンランド、インドネシア、アイルランド、カナダ、英国など、芸術家とのネットワークも生まれた。海外の芸術家にとっての魅力は「地域に芸術のコミュニティがある」ということだった。

神戸市は二〇〇五年、「神戸文化創生都市宣言」を行った。CAPの活動は、自分たちがどうしたら社会とより良い関係を結べるのか？という問いを繰り返し、実践することだった。この活動が地域にとってどれほど力になっているかは計れないが、この活動は少なくとも神戸の魅力の一部になったようだ。

# 人と自然が共生できる 地域をめざして



会長 ● 保田 茂

兵庫県但馬地域は、県最北部に位置し、豊岡市、養父市、朝来市、香美町、新温泉町の三市二町から構成され、東は京都府、西は鳥取県、南は県内播磨・丹波地域に接し、北は日本海に面している。

管内の面積は県全体の四分の一を占め、円山川流域を除いて平野部は少なく、山林が八割以上を占めている。南部を横断する中国山脈東端の山々は厳しい日本海気候と温暖な瀬

戸内海気候との境界線にもなっている。かつては全国に「コウノトリ最後の生息地」として知られていたが、環境や農業などの変化により、次第にその数を減少させ、昭和四十六年には国内の野生コウノトリがこの豊岡の地を最後に野外から姿を消した。

## コウノトリ野生復帰

### 推進計画の推進

「コウノトリを再び野生に蘇らせる」をスローガンに、コウノトリをはじめとした多様な生き物が住める環境は、私たち人間にとっても安全で安心な環境であるとの認識のもと、平成十五年三月に「コウノトリ野生復帰推進計画」が策定された。同年七月には、この計画を推進する組織として、市民、団体、学識者、行政等で構成する「コウノトリ野生



甦るかつての光景（平成20年10月円山川にて）

復帰推進連絡協議会」が設置された。

コウノトリの野生復帰に向けて関係団体が連携しながら、安全・安心で美味しいコメと生き物を同時に育む環境創造型農業「コウノトリ育む農法」の推進や、生態系の多様性を保全・再生・創出するための河川自然再生、自然環境に配慮した河川づくりの推進、かつてのコウノトリの営巣場所として知られるマツ林をはじめとした里山林を復活させるなどの環境整備に取り組み、平成十七年九月には野生復帰の第一歩となるコウノトリの試験放鳥がスタートした。こうした努力の結果、平成十九年には放鳥コウノトリのつがいから一羽のヒナが誕生し、自然界では四十六年ぶりとなる巣立ちが見られた。翌二十年には予想を超えて八羽ものヒナが巣立ち、現在、昭和三十年当時に近い二十八羽のコウノトリ

が大空を飛び交っており、コウノトリ野生復帰の取り組みは順調に推移している。

今後はさらに増加することが予想され、多くのコウノトリが生息できる環境づくり・地域づくりを一層拡大していきたいと考えている。

## 地域への拡がり

このようなコウノトリの野生復帰に向けた取り組みは、多くの人々の関心を呼び、兵庫県立コウノトリの郷公園の来場者数は、平成十二年には約十一万人であったが、試験放鳥を行った平成十七年には約二十四万人に増加、平成十八年は約四十八万人、平成十九年は約四十五万人もの視察者や見学者が国内外から訪れた。

コウノトリをはじめ、多様な生きものと暮らせる自然環境を取り戻したいという思いは、次代を担う子どもたちへも拡がりをみせている。

但馬地域内の小中学生たちは「コウノトリ育む農法」の体験学習をはじめ、様々な環境学習にも積極的に参加し、人とコウノトリが共生できる地域づくりをさらに拡げていこうという意識を高めつつある。

但馬地域は今、人と自然の共生を目指した地域づくりを住民が丸となって確実に進めつつある。



コウノトリの自然散鳥

## 有限会社 安達商事

鳥取県江府町

ローカルスーパーの  
中山間地商業への挑戦

代表取締役

● 安達享司

## ご用聞き商法と

## 大手コンビニの融合

私は、中国地方最高峰秀峰大山の南裾鳥取県西部地区の旧日野郡（江府・日野・日南・溝口町）エリアで、スーパー五店舗と移動販売車四台で食料品小売業を営んでいる。

当地域も六十五歳以上の人口が四〇％に迫る少子化高齢化が進んだ典型的な過疎地域であり、年々小売店が閉店し食品を買いたくても買えない事態に陥っている。

皆さんからよく質問されるのは「人口減と高齢化の進む地区で商売になるのか?」「人口密度の高い都市部の方が面白いのではないか」ということだ。開業のきっかけは、自ら倒産を経験し閉店する生協の引受から始まり、近年業績悪化を理由に閉店するJ A三店舗と一店舗を店も

人もそっくり引き受け、規模を拡大してきた。

私の基本的な経営理念として、商売は人と相対してこそ成り立つもので、押し売りや、価格競争でなくお客様に納得いただき、商品とともに喜びと、幸せを提供する、顔の見える商売を行う。また人（従業員）が



大型移動販売車「ひまわり号」

売り上げを生み保管する、家には無駄な人はイナイと考えている。

そんな中、高齢者が多いところに着眼し、「出掛けられない、動けないのなら、（こちらから）出掛けて行こう」が移動販売の始まり。

トラックやマイクロバスなど計四台で、江府、日野、伯耆の各集落を週二回程度訪問。五店舗を基地に食品を補充することで、物流の効率化を実現する。

## コンビニ商品を移動車で販売

四月下旬からは、「調理済みで手軽に食べられる食品が欲しい」というニーズを受け、大手コンビニ・チェーんのローソン（本社東京都）とフランチャイズ契約を結び、国道181号沿いに「ローソン江府町店」を開設した。二年前に導入した三ツトラック「ひまわり号」を使い、江府町と伯耆町の一部で、日本で初めてコンビニ商品を移動販売車で販売することとなった。

ひまわり号は、荷室が電動で約一対せり出し、室内に冷蔵、冷凍ショーケース、商品棚やレジを完備。弁当やサンドイッチ、おにぎりなどローソン商品を含め、生鮮品や日用品約七百品目を積載、高齢者や若い主婦に好評で客層も拡大し売り上げも増

加中だ。

また、移動販売行商を展開する中で収集した、暮らしの相談事、困り事など情報を、県が始めた地域見守り活動支援事業に参画したことで、県、営業エリア行政との連携が図れた。また建築業、スタンド、タクシー、薬局、郵便局などに中継する新ビジネスも検討中である。

そして、五年後、十年後を見据えたとき、流通形態変革の可能性を見越し、店舗を基地として残しつつ、コンビニとの連携と移動販売の強化をしなければならないと思う。

人口減少や後継者不足など中山間地での小売店経営は大変厳しいが、弛まない変革と顧客の立場に立ったビジネスで、「フェース・to・フェース・心の通う商売」を展開し、地域の暮らしを守り続けて行きたいと考えている。



お年寄りの目線に立った商売

## 子どもたちに教え学ぶ：

## 私の誇り



協議会理事・倉敷第一中学校区子どもたちの社会参加を  
考える会会長・ジョブサポーター ● 宮原公恵

## ふれジョブ活動がもたらすもの

ふれジョブを通して何がしたいかは明確である。自分の住んでいるこのまちで、生涯生き生きと楽しく暮らすこと、ただそれだけである。

たったそれだけことが案外難しいのであるが、皆が少しずつ力を出し合うことでそれが実現することを、この活動は実感させてくれる。

子どもたちは働く喜びを知り、ジョブサポーターは子どもの成長にかかわることができる。地域にすばらしい企業があることにも気づいた。

「子どもたちやジョブサポーターさんから学ぶことがいっぱいある」と言われる企業の方から、また学ぶ。

「学校では学べない本物の経験を翌日、子どもが話すことで成長の循環が起きている」

先生方と一緒にあって、子どもを育てる喜びを味わっている。かかわった者みんなが幸せを感じるまちぐるみの活動になりつつある。

仕組みはシンプルで、障害のある子どもなど支援の

必要な子どもが週に一回、一時間程度の仕事の体験をする。ジョブサポーターと一緒に地域の企業で働く。

ただし、一企業での体験は六カ月を限度にしている。これは子どもたちの体験を増やすことが目的だからだ。

さまざまな職場や人のかかわりが子どもを育てる。ジョブサポーターも子どもと一緒に日々、新しい

経験をさせていただいている。

仕事の一つ一つに大きな意味があること、人の役に立つことが大きな喜びになること、素敵な人に出会うと自分の世界が大きく広がること、私がいることを喜んでくれる人がたくさんいること、などを体験を通じて学んでいく。

さまざまな体験の喜びもさることながら、それ以上の「お楽しみ」は定例会である。月一回、各中学校区の公民館や学校で行われている集い



スーパーマーケットでふれジョブ中～優しいまなざしに守られて～

の場には保護者と子ども、ジョブサポーターはもちろん企業、学校の先生、地域の関心のある方が参加される。私たちの応援団といったところであろうか。

理由は？というと、楽しいからである。お茶を飲みながら子どもたちの成長を喜び合う時間は何物にも代えがたい。自分が生きている、活かされていると感じる時間である。

## 子どもたちこそ地域に貢献

この子どもたちに出会わなければ得られなかった、心から楽しい時間を過ごさせていただいている。彼らが住民として、地域に貢献している証であると思う。

人の幸せは、実はシンプルなもの。で出来上がっていくものだと思う。誰かにうれしい言葉をかけてもらって、誰かにやさしい言葉をかけてあげられる、誰かが誰かに美しい言葉をかけているのを聞く。それらがすべてこの会にはある。

だからこそ人が集うのだと思う。今の力でできることを自発的に行う活動なので、みんなそれぞれに失敗も多いが、それを仲間が受け止めて許しあい、元気に換えていく温かい活動である。その一員であることは今の私の一番の誇りである。

# 市民活動を原動力に まちの環境を再生

研究会事務局

空を覆った「七色の煙」、大腸菌でさえ棲めない「死の海」……。高度経済成長を支え活気と誇りに溢れた昭和の繁栄のころ。しかし、その影で大気汚染と水質汚濁により、市民生活が脅かされていた一九八〇年代。「家族を守りたい」との思いで立ち上がった市民の活動が原動力となり、鮮やかな変貌を遂げた経験を持つ北九州市では現在、環境モデル都市として国内はもとより世界に発信する先進的な取り組みが始まっている。

## ◆平成版◆ 北九州市民活動

環境再生を果たした北九州市は、全長約二百キロメートルを持つ海岸線、圧倒的なスケールで市内全貌を望める山系、それらをつなぐ市街地、里地など自然環境も多く残す。併せて、環境関連技術の開発やリサイクル産業



竹林・里山のがっこう

が集積する「北九州エコタウン事業」の展開や、先端科学技術の教育・研究機関との連携が進める「北九州学術研究都市」など、経済的・知的基盤も整備されている。

さらに、現在の様々な環境問題の対策にはもはや学術レベルのみでは解決できず、市民をも巻き込んだ産学官民による、地道な取り組みによって推進する必要がある。二〇〇一年、



水辺のがっこう

北九州市若松区において、環境に関する様々な分野で活動する大学教員・建築家・民間企業や行政職員が中心となり研究会を発足させた。

自然環境、産業と知的基盤が共存する若松区を流域一体で環境学習の資源として、そこに住まう住民を財産として捉え、「環境改善まず地域から」を合言葉に、地域住民参加型の環境保全活動を通じて流域一体の環境改善とともに、市民の環境に対する意識の向上から地域が抱える課題を地域の人が克服することを目的とした取り組み。平成版北九州市民活動の始まりであった。

## 市民力が地域活力に

子どもからお年寄りまで、多様な主体が参加しやすい仕組みを構築。三つの「がっこう」に見立てた活動

で、地域の環境向上、景観の整備、環境学習だけでなく、社会的・経済的な側面まで循環型のまちづくりの一端を担っている。

【田んぼのがっこう】 田園風景を今も多く残す里地において、子どもと保護者を対象に季節を通じて田んぼを取り巻く幅広い情報を提供する体験型環境学習。

【竹林・里山のがっこう】 竹林の放置による森林への竹の侵食などが問題となる中、北九州市においても例外なく同様の問題が顕在化している。竹林保全活動を「平成竹取伝説」と銘打ち、広く市民と共に竹林・里山の管理を行い、さらに地元企業との協働により、竹林残渣の利活用による社会的・経済的循環のシステム構築も実証研究している。

【水辺のがっこう】 かつて水質汚濁を克服した洞海湾で、竹とムラサキイガイによる水質浄化実験や貴重植物種の保護など体験型環境イベントを実施。

地域特有の環境をそこに住まう人自身が愛し、さらに自らでよくしていこうとする取り組みは、人と人のコミュニケーションにより豊かな心を育み、人財を育成し、環境改善を超え、現在日本が抱える様々な社会問題を解決しようとしている。

## NPO法人つどいの広場いづか

## 幼稚園跡地に築いた

## 子育て施設



理事長 ● 林 京子

緑色の風が  
吹き抜ける小さな丘  
たった一人でいつまでも  
立ちつくしてた時さえ  
夢はあきらめない  
仲間達との約束  
みんながいる  
それだけで  
希望がまたわいてくる

右の詩は、つどいの広場いづか（以下、広場）五周年を記念して作った歌の一部。歌詞のとおり、広場は小さな丘の上にある。ピンク色の屋根が目印だ。広場では毎年七月に開設を祝うお祭りをする。

「ここはみんなの広場だよ。それぞれ力を出し合って、皆で一緒に楽しもう」というお祭りに、去年は六百五十人以上が参加した。



つどいの広場いづか外観

平成十四年三月末、市立幼稚園統廃合に伴い、跡地利用の方向が明示されないまま、鯉田幼稚園は廃園となった。その後「子どもの施設だったものは子どものために！」との市民の声に応え、市もここを子育て支援施設として活用することを決定した。

ただ、誰がどのような形でオープンさせるのか。市は公の施設を特定の一団体に貸すことはできないとい

う。そこで、子ども関係のボランティア団体などが協力し合い、施設運営を担うことにした。集まったボランティア同士が子どもの居場所作りのための思いを共有することから始めなくてはならず、市との諸々の協議も必要だった。

理想の施設像は一致していた。誰でも使える。簡単な手続きで使える。何時も開いている。見守りの人がいる。困ったときの相談や情報収集ができる―等々。しかし、具体的に自分たちでやるとなると、各団体からは「できない理由」ばかりが聞こえてきた。施設運営に対する団体間の温度差もあった。

## 開設した広場は「協働」の成果

だが、そこに「場所」があるというのは強かった。子どもと子どもに関わる活動をする大人がつどえる施設をなんとか作り上げたいという思いで、「これならできる」ということを出し合った。「不登校支援をしながら平日は開けられるよ」「乳幼児の親子のための事業を出張させよう」「週末の体験活動なら任せて」「地元も協力しよう」

市は光熱水費の全額負担と、トイレなどのバリアフリー化を約束した。運営費の一部は、福岡県青少年

アンビシャス運動に参加することでまかなうことにした。必要な物は持ち寄った。いただいたり、無期限で借り受けた物もある。

始める前に何度も話し合った。市が用意したものを民間で引き受けたのでも、民間の提案を市が採用したのでもない。何も決まっていなかったところから始めた。そうやって開設した広場だからこそ、市も私たちも広場のことを同じように大切に思っている。「やらされている感」は決してない。これが協働なのだと改めて感じている。

平成十五年四月に広場を開設して六年。広場にはやりたいことをいっぱい持った子どもや大人が集まって来る。広場に行けば仲間がいる。一人ではできないことも、仲間と一緒にならでできる。今後もそんな広場であり続けようという心で誓っている。



お庭でお花見お弁当



京都学生祭典実行委員会  
●京都市 (P16)  
グランドフィナーレの総踊り



NPO 法人 芸術と  
計画会議  
●神戸市 (P17)  
「100人大掃除」の  
参加者たち



コウノトリ野生復帰推進連絡協議会 ●兵庫県豊岡市 (P18)  
人とコウノトリが共生できる地域づくり



有限会社 安達商事 ●鳥取県江府町 (P19)  
コンビニ商品を移動車で販売

平成20年度 地域づくり総務大臣表彰



北海道標津町 ●北海道 (P27)  
「地域ハサップ」によるサケ荷揚げ作業を見学する修学旅行生



宮城県栗原市 ●宮城県 (P28)  
地域づくりプランナーから指導を受ける (若柳地織)

NPO つどいの広場いづか ●福岡県飯塚市 (P22)  
つどいの広場の歌を作ろう



倉敷市インクルージョン推進事業全体協議会  
●岡山県倉敷市 (P20) 大人も子供も参加した定例会



NPO 法人 北九州ビオトープ・ネットワーク研究会  
●北九州市 (P21) 田んぼのがっこう





香川県小豆島町 ●香川県 (P32) オリーブ収穫祭



茨城県大子町 ●茨城県 (P29) 「山田ふるさと農園」 事業



群馬県上野村 ●群馬県 (P30) UI ターン者による作業



宮崎県 ●宮崎県 (P33) 県庁前「楠並木朝市」



山梨県北杜市 ●山梨県 (P31) 太陽光発電施設



セーラ・マリ・カミングス氏 ●長野県小布施町 (P37)  
「桶仕込み保存会」も立ち上げる



清水義康氏 ●滋賀県長浜市 (P38)  
観光客を呼び込むイベント

羽賀友信氏 ●新潟県長岡市 (P36)  
多文化共生社会の実現を目指して



南風原町 ●沖縄県南風原町 (P34)  
まちづくり未来塾の参加者



皆川トメ子氏、山内サトミ氏 ●福島県昭和村 (P35)  
「からむし織」の糸延べの作業



## 北海道標津町

北海道

## 小さくても

## キラリと光るまち



町長 ● 金澤 瑛

受けたことがある。

北海道の東に位置する標津町は、眼の前二十四<sup>キ</sup>先に北方領土国後島を望み、世界遺産知床半島やラムサール条約登録湿地の野付半島の基部に位置する、世界的な自然や景観を有する風光明媚な地である。

サケ・ホタテを中心とする水産業と広大な草地を活用した酪農業を基幹産業とする生産の町である。特にサケ漁は昭和六十年から十五年連続で、水揚げ日本一となるなど、現在も日本有数のサケの産地としてサケにこだわるまちづくりを進めている。

## 国内初、浜の高度衛生管理システムを確立

平成十年に道内の他地域で製造されたイクラから「病原性大腸菌O157」が発生し、本町水産加工業の柱である鮭イクラにも風評被害を

このことから、平成十二年に地域の漁業関係者が一体となり、国内初となる漁獲から市場・加工・流通までの地域水産業が一貫した高度衛生管理する「標津町地域ハサップ（HACCP）」が確立された。

鮮度とともに「安全・安心」が確保され、日本一の産地として、また、消費者に信頼を届ける手法として、今日ではサケやホタテのブランド化に大きく貢献している。

消費者へ地域ハサップを広く知ってもらうことから始まった「地域ハサップ体験・モニターツアー」を実施し、見学船でのサケの網おこしや漁港岸壁でのサケの荷捌き作業、加工場での製品づくりなど、サケの鮮度と安全・安心対策の生産現場を公開し、好評を得た。



修学旅行生を受け入れているエコ・ツーリズム酪農体験

この成功を契機に、観光資源としても十分魅力的であることが分かり、滞在型観光を進めたい観光関係者の希望と水産関係者の思惑が一致し、平成十三年に「標津町エコ・ツーリズム交流推進協議会」を設立。町を挙げた取り組みとして動き出した。

現在では、受け入れの中心となる「町民観光ガイド」も八十五人に増え、地域資源を活用した四十九の

体験メニューを用意して、小規模宿泊施設が一体となって「分宿」で受け入れし、これまで道外の修学旅行生を二十校、千五百七十四人（平成二十年）受け入れるまでに至った。

## 町民・地域協働の取り組み

今年で十年目を迎える地域ハサップや町民ボランティアによるエコ・ツーリズムのこれまでの取り組みは、町民の方々と地域の皆さんの「汗の結晶」である。

平成十八年には、町づくりの指針とする「標津町ふるさと新生プラン」を策定し、町民力、地域力、行政力の融合による協働の町づくりを進めており、平成十九年にはNPO法人「日本で最も美しい村」連合に加盟し、志を同じくする「村」と協調して景観資源の保全や交流人口の拡大にも取り組んでいる。

本町は、限られた財源と限られた人しかいない小規模な町であるだけに、決して町民の皆さんが満足しているとは考えていないが、満足はできなくても「納得」のできる町づくりを、そして「小さくてもキラリと光る町づくり」を、これまで同様に温かい町民の皆さんとともに協働の力で推進していきたい。

# 田園観光都市づくりへ 地域の総力結集



市長 ● 佐藤 勇

昨年六月十四日に発生した岩手・宮城内陸地震の際には、国をはじめ多くの機関・団体、そして多くの方々から様々なご協力や温かいご支援をいただき、心から御礼申し上げます。これからは雪解けを待って、行方不明者の捜索再開とともに、今年を「復興元年」と位置づけて、栗原市民が「復興元年」と位置づけて、栗原市民が一丸となり復旧さらには復興に向けて頑張る年でもある。

## 地域の魅力を探る 多彩な事業手がける

さて、栗原市は宮城県の北部に位置し、平成十七年四月に九町一村が合併してできた市で、全市の一体感の醸成や将来にわたる元気な地域づくりのために取り組んだのが「田園観光都市創造事業」である。

平成十八年十月に田園観光都市室（くりはら研究所）を設置し、観光・



市民探検ツアーでの長屋門

交流による地域づくりプランナーの故・麦屋弥生さんからご指導を受けながら事業を進めてきた。基幹産業である稲作が大事に引き継がれてきたこの地域の歴史・生活文化・食文化など市民が自慢できる地域資源の調査・発掘を、市民ボランティアの「くりはら磨き隊」の方々と一緒に始めた。



くりはら磨き隊の資源発掘会議現地調査  
(桜田山神社)

同時に、地域の魅力や観光産業への気付きを促すためのシンポジウムや小講演会を開催するとともに、新しい観光を提案するための準備として、市民参加の探検ツアーや都会の若者を受け入れての地域づくりインターン事業の実施、これら一連の事業を市内外の方々に知ってもらうための「くりはら研究所だより」の毎月発行、などに取り組んできた。

これらの調査研究事業は、麦屋さんによって「くりはら田園観光都市創造事業調査研究報告書」としてまとめられ、昨年四月に設置した田園観光課に引き継がれて、今後の事業展開の指針になっている。

## 「ふるさと応援団」も誕生

栗原市が目指しているのは、地域資源を活用した人と人との交流が盛んなまちづくりであることから、市

民を対象とした取り組みだけではなく、市外の方々からも応援していただくために「ふるさと応援団・くりはら輝かせ隊」も作った。

メンバーは、全国の栗原市出身者や麦屋さんのお知り合いの方などで、栗原を応援していただける方々で、くりはら研究所だよりやメールマガジンを送り、交流会を開催してきた。

このような取り組みを行ってきたところ、小学校や高等学校、大学などで、新たに地域資源の調査やPR用DVDの作成活動が行われ、また商工会やNPO団体では地域マップの作成や街中散策、長屋門めぐりのボランティアガイド活動が始まるなど、観光産業づくりに向けた新たな地域活動も生まれてきた。

このように田園観光都市づくりは行政でスタートした事業だが、徐々に市民や地域団体、学校の児童・生徒なども参加する姿が出来上がってきた。

これからも、来ていただいた方に五感で栗原の良さを感じてもらえるニューツーリズムを目指して、市民、地域団体、NPOなどが主役となり、さらに農業・製造業・商業など地域の総合力でお客様を受け入れる元気なまちづくりを進めていきたい。是非、皆さんも栗原において下さい。

## 茨城県大子町

茨城県

# 活力ある町を目指した オリジナル施策



町長 ● 綿引久男

大子町は茨城県の最北西端に位置し、北は福島県、西は栃木県に接する。日本三大名瀑の一つ袋田の滝、清流で知られる久慈川、県内随一の奥久慈温泉郷など自然資源に恵まれた山紫水明の地で、町外から年間約百五十万人が訪ずれる、観光と農林業の町である。

過疎や少子・高齢化など多くの問題を抱えるが、活力ある町づくりをめざし、様々な独自性の強い施策を展開している。施策の二本柱となっているのが、外部からの活力導入を行う「山田ふるさと農園」事業と、内部の活力で住民活性化を行う「読書のまち宣言」だ。

## 山田ふるさと農園

事業の出発点は、財政的に新たな開発・基盤整備が困難な状態の中、



幼少期から本の面白さに触れる

費用をかけずに遊休町有地を活用して、住民を誘致できないかという発想がスタートだった。一区画三百坪前後の広い土地を二十年間の長期にわたり無償で貸与し、使用方法は農業に限定せず芸術活動をするなど自由とした。

また、使用者自らが家屋などを自由に建築し使用することができる。当初、クラインガルテンを検討したが設備投資および維持管理などの

経費を考慮、現況のまま貸し出す事業内容により、少ない経費で次のような大きな成果を生むこととなった。

① 町有遊休地の有効活用（遊休地の解消）② 人口（世帯）及び交流人口等の増加③ 固定資産税及び住民税の増収効果④ 新しい人材（財）の確保⑤ 地元建設業者等への経済効果⑥ 地元商店での購買・消費効果

全体では、十年間で約六億円以上の経済効果がある、と試算している。

## 数十年先見越し

### 「読書の町宣言」

もう一つの柱は、読書への取り組みだ。読書のよさを活かし、読書を楽しむ人があふれる町づくり、読書を通じて心の豊さを育てる町づくり、読書のすばらしさを全国に発信する町づくりを目指し、「読書の町宣言」をした。

読書習慣定着のため、ブックスタート・家読・朝読・読み聞かせなど様々な手法で読書のまちを確立し、宣言という形で意識化を図った。これらの成果として、子どもの読書時間が大幅に増え、子どもたちの心が落ち着き、好奇心や知識欲を育む効果のほか、読書により親子のコミュニケーションが図られている。図書館での本の貸出数も大幅に増え、町民の読書習慣もうかがえる。

（1）ブックスタート＝健康相談・健康診査の際に、一歳児から三歳児までの赤ちゃんに絵本を二冊贈呈。「森のおはなし会」などの協力を得て、贈った絵本の読み聞かせを行っている。

（2）読み聞かせ＝幼少期に本の楽しさや面白さに触れ、本に親しむ習慣や読書は楽しいという意識を確立する。

（3）あさどく（朝読）＝読書運動の一つとして町内すべての小・中学校（十三校）で朝読を実施している。

（4）うちどく（家読）＝だいたい小学校が全国で先陣を切って「うちどく」のチャレンジを始め、これを受けて大子町が全国に先駆け「町ぐるみ」での取り組みを始めた。

（5）その他＝「大子町読書の日」「大子町子ども読書会議」などを設置し、意識の高揚を図り、継続的に自主的な取り組みを目指している。

山田ふるさと農園は、町の起爆剤となる事業で、地域経済の活性化など大きな実績を上げていく。また、読書のまち宣言は、知的分野での向上や人材育成を図る施策で、数十年先を見越した事業だ。自治体間の競争が激化する時代、これらの取り組みにより、他自治体の先駆者となっていくことが肝要であると考ええる。

# Uターン者が 村の人口の一割強に



村長 ● 松元 宇隆

本村のUターン事業への取り組みは大変古い。まず昭和五十一年度から五十二年度に建設した現在の銘木工芸センターを中心に、村の九四%を占める森林資源を有効活用して木工芸の振興を図るため、加工施設や展示販売施設を整備し、村の地場産業として定着させている。また、森林整備事業についても木工芸同様Uターン者の就業の場として現在も大変就職率の高い職種である。

特産品開発や製造販売事業は、十石みそについては農協が中心となり、



みそなど上野村の特産品

また椎茸や舞茸の出荷・加工品については、企業がないため村が直営工場を運営し、就業の場も提供している。

村営住宅の整備状況であるが、様々な制約のある公営住宅の補助金を使用せず、Uターン者が主として使用できるよう村単独で整備している。

このほか平成十年度からは、国土保全特別対策事業で農林業従事者のための住宅も整備し、地域活力創出事業債や地域活性化事業債でも住宅を整備しているところである。

## 村営住宅からは 赤ちゃんの泣き声

現在は七十三世帯分整備され全戸入居しているが、平成二十年度も新たなUターン者の定住が予定されているため、新たに緊急的に村営住宅の整備が必要になっている。各集落に村営住宅を分散配置しているの



Uターン者向けフェア

で限界集落の解消にも結びついている。地元の人からも「赤ちゃんの声が聞こえる集落になった」というような、喜びの声も聞こえてくる。

後継者定住促進条例であるが、生活補給金、結婚祝金、仲人報奨金、住宅資金利子補給の内容である。主としてUターンしてきたときには所得的に大変不利になる場合があり、そのようなときに生活補給金として月五万円、最長三十六カ月支給するものだ。

他の制度として誕生祝金、養育手当（三人目から月額一万円、最長十五年間支給）、子供の福祉医療（義務教育までは通院及び入院医療費無料）、保育の低額実施（月額二千円）などもあり、後継者らが裕福な生活とまではいかないまでも、生活が営めるよう条例等も整備している。

現在では百六十人程度のUターン者が定住し、村の人口の一〇%強を占める。これらの定住者は全て四十歳以下の子育て世代であるの

で、上野村の少子化対策にも一役買っている。

実際に上野村に定住された方に聞くと、「都市部で月収四十万円で暮らしてきたときより、上野村でもらう給料が二十万円でも、支払うものが少ないため豊かに暮らせるような感じがする」と感想を聞いたこともある。

## Uターン事業に確実な成果

年々、Uターン者の数も増え、村営住宅はほぼ満室状態である。企業がないため村が中心となり、若者の農林業従事者・木工芸従事者・特産品製造販売施設（上野村きのこセンター・十石みそ工場・森の菓子工房等）・株上野振興公社（第三セクター）などの観光事業への従事者なども増加し、新たな村の後継者が増えていく。

Uターン者の増加により、村営住宅が各集落に分散されて整備されるため、限界集落対策や子供が増加することによる集落の活性化対策にもなっている。また、Uターン者は大半が四十歳以下の子育て世代であるため、村の少子化対策につながっている。このような状況は全国的にみてもあまりないケースだと確信している。

## 山梨県北杜市

山梨県

水と緑と太陽を活かした  
ベンチャー自治体をめざして

市長 ● 白倉政司

## 山岳景観に囲まれたまち

北杜市は、山梨県の北西部に位置し、八ヶ岳、南アルプスなど日本を代表する山岳景観に囲まれた文字どおり「杜のまち」である。

日本のミネラルウォーターの約三〇%を産出する清らかで豊富な水資源、日本一長い日照時間、国蝶オムラサキの生息数日本一など豊かな自然環境に恵まれた地域である。

また、日本画の第一人者である平山郁夫先生の「平山郁夫シルクロード美術館」、国語学者で言語学の権威であられた故金田一春彦先生の蔵書、遺品等を収蔵、展示した「金田一春彦記念図書館」などいくつもの一流の文化施設がある。

さらに、昨年六月に「金峰山・瑞牆山源流」が、環境省から「平成の

名水百選」に認定され、既に認定されている「白州・尾白川」「八ヶ岳南麓高原湧水群」と合わせると、三つの名水を有する全国で唯一の自治体となり、まさに「日本一の名水の里」となった。

今、地球は温暖化による異常気象など、世界的にその危機が叫ばれている。本市では、恵まれた自然環境である「水と緑と太陽」を活かし、「国の大規模太陽光発電実証研究施設」の誘致、「六ヶ村堰小規模水力発電所」の建設、「電気自動車モデルゾーン実証実験事業」など、時代が要請するクリーンエネルギーに関する先進的な取り組みを行ってきた。

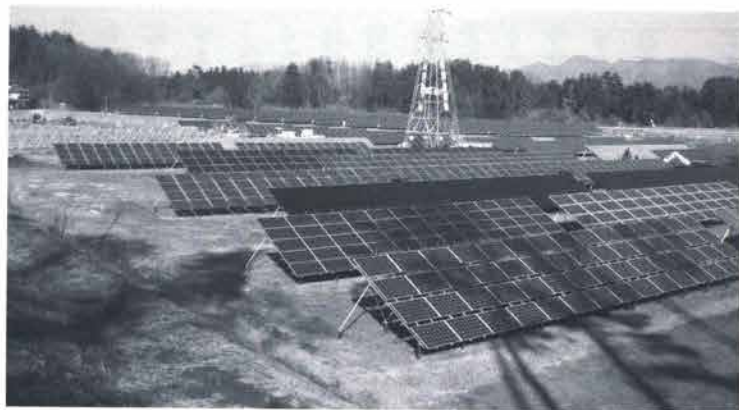
## 「環境保全協力金」制度を創設

また昨年四月には、北杜市の誇る貴重な自然資源を良好な状態で次世

代に引き継いでいくことを目的として、市内の企業や、市内外の皆さまからのご協力による「環境保全協力金」制度を創設したところである。

国の太陽光発電実証研究への取り組みについては、平成十八年度にNEDO技術開発機構が公募した「大規模電力供給用太陽光発電系統安定化等実証研究」の委託先に決まり、平成二十年三月に北杜サイト第一期設置工事が完了した。

様々な種類の太陽電池による太陽光発電システムを構築し、既存の電力会社の送電線へ接続した場合にも



日本一長い日照時間を利用した太陽光発電施設

悪影響を及ぼさない発電システムの実現を目指して実証実験に取り組んでいる。

また、第一期設置工事を完了を契機に、官民一体の北杜市地球環境対策・クリーンエネルギー推進協議会が設置され、北杜市から全国へ、環境問題を考えようと市内各主体が自主的に協働しながら環境についての論議が行われている。

今年度は、太陽光発電の研究を契機に北杜市環境基本計画を策定したところであり、協議会の市民メンバーにも協力していただく中で、市民とともに「人と自然と文化が躍動する環境創造都市」の実現を目指している。

さらに施設の見学が可能となった平成二十年四月からは、フランス環境・エネルギー管理庁や中国・韓国の行政機関などが視察に訪れるなど、国内だけでなく国外においても高い評価をいただいている。

今後は、この施設を市の環境教育の拠点とし、「太陽と人が出会う場所」をコンセプトに次世代エネルギーパーク計画を策定し、市民がより環境に優しい暮らしに向けた活動を展開できる場とするともに、多くの国内外の方々にも訪れていただく「交流の場」としていきたい。

# オンリーワンの資源 オリーブによるまちおこし



町長 ● 坂下一朗

小豆島町は、小豆島の南東部を占める、自然に恵まれた人口約一万七千人の町である。小豆島町は日本におけるオリーブ栽培発祥の地として、また、「二十四の瞳」の舞台として全国的に知られている。

小豆島町の産業は、醤油・佃煮・素麺などの食品産業が中心で、これまで堅実に発展してきた。しかし



オリーブ公園風景

近年は環境が悪化し、雇用や税収も厳しい状況にある。また、島嶼部の例に漏れず過疎化が進行するとともに、高齢化率も年々上昇し県下一となっている。

このままでは地域の将来は極めて厳しいという危機感から、オンリーワンの地域資源であるオリーブの実りをまちの活性化に結びつけていくべく取り組んでいる。

## 国産志向の高まり機に 低迷から供給不足へ

小豆島におけるオリーブの歴史は、明治四十一年（一九〇八年）の農商務省による試験栽培が始まりである。

三県で行った試験栽培の結果、小豆島だけが根付き、その後栽培面積も順調に増加したが、昭和三十四年の輸入自由化により減少に転じ、昭和

和六十年代まで低迷していた。しかし、このころから、国産志向やオリーブの持つイメージの良さからオリーブが見直され、供給が不足するようになってきた。

このため、まず取り組んだのがオリーブ栽培面積の拡大である。小豆島町は二町が合併して誕生したが、両町とも苗の配布や助成など、栽培推進に取り組んでいた。平成十五年には「構造改革特区第一号」の認定を受け、醤油製造会社などがオリーブ栽培に参入、現在では約十六社のオリーブ畑が民間企業により運営されている。

行政でも「オリーブ係」から「オリーブ室」を経て「オリーブ課」を発足させ、オリーブを機軸に総合的な施策が実行できる体制を整えている。

## 「オリーブ百年祭」で 多彩なイベント

平成二十年（二〇〇八年）はオリーブが小豆島町に根付いてから百周年という記念すべき年である。この絶好の機会にオリーブを全国にPRするため、年間を通じたイベントである「オリーブ百年祭」を開催した。

四月の記念式典を幕開けに、オリーブフェア、ハーブサミット、ハーブフェア、オリーブ検定、本場スペインのカタドールを招いたセミナー



オリーブ収穫祭

などを開催したが、特に著名人を招いて開催した昨年十月のオリーブ収穫祭では、島外からも多くの観光客が訪れにぎわった。

マスコミの注目度も高く、テレビなどで小豆島が取り上げられることがこれまでに大きく増えた。観光客数も県内の観光地が軒並み減少する中、オリーブ関連施設は二割以上伸びている。

しかし、いくら盛り上がったとしても、一過性で終わっては何にもならない。今後は観光はもちろん、食品産業と連携して取り組んでいる新商品の開発などにより「オリーブアイランド小豆島」のイメージを一層高め、小豆島ブランドを確立することにより、さらなる活性化につなげていきたいと考えている。

# 県民総力戦による オンリーワンの自治体を目指して



知事 ● 東国原英夫

## 住民主体の元気な集落づくり

中山間地域の集落の維持・再生を図るため、今年度、宮崎県が独自に取り組んでいるのが「いきいき集落」である。これは元気な集落づくりに取り組み集落を「いきいき集落」と命名し、この呼称にふさわしい元気な取り組み



県職員が案内する県庁見学

みをしている集落を県内全域に増やそうという、全国初の試みである。

昨年十二月末で、県内十四市町村から五十三地区の応募があった。これに最初に名乗りを挙げたのが人口わずか千三百人の西米良村の小川地区。高齢化率は七〇%超だが、この地区がとっても元気なのだ。

現在、村固有の生活文化である作小屋（農業などのための居宅とは別の住居）の復元を図り、地域住民の共同作業や都市住民との交流の場を整備し、住民による独立採算制での運営を目指している。

思うに、これからの地域活性化に必要なのは「地域力の発揮」である。地域の問題を自らの問題として捉え、地域住民をはじめ多様な主体が参画してその問題の解決や地域の価値の創造を行うことが重要である。

もはや行政主導で地域活性化を図る時代ではないのだ。

この小川地区のような住民主体の取り組みが今後、ますます活発化することを期待している。

## 地域資源の発掘と情報の発信

これまで宮崎県のトップセールスマンとして宮崎を県内外に積極的にPRしてきた。その結果、宮崎牛やマンゴー、地鶏など優れた県産品が全国に知られるところとなり、県外からの観光客数が増加に転じるなど、「宮崎」の存在感は確実に高まっていると感じている。

しかしながら、宮崎にとつての正念場はこれからだ。これまでの宮崎ブームを一過性に終わらせないための努力と創意工夫が大事である。

今、宮崎県では県庁が新たな観光スポットとして注目を浴びている。県職員自らが観光客を案内するスタイルも好評で、見学者は既に七十万人を突破した。

現在、この県庁のように県内に眠る観光資源を発掘し、特に素晴らしいものを「みやざき遺産」として認定し、新たな観光資源につなげる取り組みを行っている。これまで二百件以上の応募があり、その認定作業中である。まさに第二、第三の県庁

の出現が待ち望まれている。

宮崎にはまだまだ多くの観光資源や特産品などがあり、高いポテンシャルがあると信じている。今後とも、県民一人ひとりが新たな視点や発想で地域の資源を見つめ直し、それを磨き上げるとともに、トップセールスなどを通じて、本県の魅力のさらなる発信に努めていきたいと考えている。

今回の地域づくり総務大臣表彰の受賞は、県民一丸となったこれまでの元気な宮崎づくりの取り組みが評価されたものである。これから、今回の受賞を励みとして、地域力を発揮しながら、本県ならではの魅力や資源を最大限に活用し、オンリーワンの存在感のある自治体を目指して、県民総力戦で頑張っていきたい。



知事のトップセールス

# 住民が総合計画に 関心を持ち始めた



町長 ● 城間俊安

南風原町は県都那覇市の東側に位置する、人口約三万四千人、沖縄では唯一、海に面していない町である。その南風原町では平成十七年から第四次の総合計画策定に取り組んだが、その際に町長から指示が出たのは、「白紙の状態から住民参加で」だった。

それから約一年半、徹底的な住民参加と情報共有により、総合計画策定に関わった地域住民が大きく変わった。

## 住民が作った「設置要綱」で公募

南風原町の総合計画策定において住民主体で構成された「南風原町住民会議まちづくり未来塾（以下、「住民会議」）」が大きな役割を担った。この住民会議は、全員公募で無報酬、さらに自主運営を基本とするなど、

これまでにない色々な決め事が「設置要綱」に書き込まれている。

驚くべきは、この「設置要綱」も住民の皆さんが議論して作り上げたということだ。自分たちで作った決めごとなので、自ずと住民による会議内容は建設的になり、回を重ねるごとに議論が深まっていた。

総合計画を住民参画で策定している自治体は全国にも多い。その中で、南風原町が評価された点は、総合計画策定後の施策展開において住民が関わっていることである。住民会議のメンバーは、「自分たちが関わって作った総合計画だから、実践にも関わらないといけない」という気持ちを持っていて。まだ一部ではあるが、まちづくりに関心を持ち積極的に関わる住民がいることで、他の住民に与える影響は大きい。

住民会議で総合計画の策定に関わったメンバーの中には、県内の自治体へ講師として招へいされる方もいる。「職員ではなく、ぜひ住民の声を聞かせてほしい」という依頼が少なくない。人前で実践報告をすることで、さらにまちづくりへの関心が高まり、日に日にパワーアップする住民の皆さんを目の当たりにして、今回の総合計画策定のプロセスは間違っていないと確信する。

## ポイントは「まちづくりの学びあい」

総合計画の策定において一番重要視したのは、生涯学習の視点である。住民から遠い存在である総合計画なので、その策定プロセスを「まちづくりの学びあい」として位置づけ、学びを通して少しずつ「気づき」を得ていただける構成にした。

住民の皆さんは期待以上に学びあい、多くの仲間を作り、そして今まちづくりの実践へと向かっている。

今回の総務大臣賞の朗報を聞いて、「普通のことを普通にただけなのに」と淡淡と応えた住民会議メンバーは、「これを機に受賞記念フォーラムを開催しよう」と自ら動き出した。

受賞通知から一週間後の今年一月、それから一カ月後の今年二月、



平成 21 年 1 月に開催された受賞記念フォーラムの様子

受賞フォーラムは成功裏に終えた。パネラー三人のうち二人が住民会議メンバーであった。参加したとなり町の自治体職員は「本当に住民ですか。堂々としていて、まるで職員ですわ」と驚いていた。

南風原町において住民とともにまちづくりを進める体制が少しずつ動き出しているが、まだまだ始まったばかり。今後も紆余曲折はあるだろうが、スーパージンと楽しくまちづくりを展開したい。

## 皆川トメ子、山内サトミ

## 「からむし」だけは絶やすなよ



昭和村総務課企画係長

● 本名久喜

奥会津の昭和村は、四季折々に美しく変化する豊かな自然を守り、六百有余年にもわたり綿々と受け継がれてきた本州唯一の「からむし」を栽培し、伝承している村である。

「からむし」とは、イラクサ科の多年生草本の植物で、別名「苧麻（ちよま）」または「青苧（あおそ）」と呼ばれる。昭和村は本州唯一のからむし生産地で、その技法は国選定



糸づくりを若者に伝える

保存技術にも指定され、高品質の原麻は越後上布や小千谷縮布の原料として出荷されてきた。

以前は、からむし織製品を見ても「からむしって何?」「どんな虫なの?」と問う声が多く、知名度も低かった。このため「からむし」に新たな息吹がほしい、「からむし」は村の文化遺産でもあり村づくりには欠かせない地域資源だとして、「からむし織体験事業」が誕生した。

平成六年一月、「トウばあ、サトばあ、『からむし』で全国から織姫さんと呼んできたら指導員やってくんねえか」という村職員の問いかけに「やっぺえ。今のままでしょうがねえ」と、皆川トメ子、山内サトミ両氏が即賛同してくれ、「からむし織体験生制度」の企画段階から参画し、現場の指導員として体験事業がスタートした。

からむし織体験生制度は、地域づくりに向け新たな息吹を取り込んでいくため全国から織姫（女性）・彦星（男性）を公募し、五月、翌年三月の約一年間、「からむし」の栽培から織りに至るまでの作業工程と畑作業なども含めた山村生活を体験してもらう、という事業である。

両氏は、昭和村に受け継がれてきた「からむしだけは絶やすなよ」という言葉をかたくなに守り、農業のかたわら「からむし」を栽培し、その「からむし」を独自の工夫を凝らしながら帯、着物、帽子などの製品づくりに従事。その一方で、からむし織体験生に栽培から糸づくり、織りに至るまで、献身的かつ真摯に指導を行っている。

## 80人の織姫・彦星を受け入れ

また、野菜作りなどの農業体験を含めた田舎暮らしについても幅広く伝授し、体験生から絶大なる信頼を受け、平成二十年度の十五期生を含め、北海道から九州まで全国から総勢八十人の織姫・彦星を受け入れ、うち二十一人が定住して「からむし」関連事業に携わっている。

これは、両氏が全国各地から来

た体験生にとって、昭和村での親族に代わる祖母となり良き相談者となり、日常的な心の支えになっていることの証しで、多くの村民が両氏の心遣いと活躍に目を細めている。

さらに、地域住民は全国から参加してきた織姫・彦星との交流を通じて「からむし」への関心が高まり、からむし栽培農家も増加して、村の宝物と自負するまでに成長。関連する従事者にも刺激を与え、現在では約百五十人が様々な商品を製品化し販売するなど、村民一人ひとりに自信と誇りが芽生え育っている。

また、全国に知名度も広がりを見せ、着実に観光交流人口も増加し、二人の活躍があったからこそ、「からむし」事業に従事する人々をはじめ、村民に大きな誇りと自信を与えることができ、「からむし織の里・昭和村」として定着してきた。



織姫作品展

## 羽賀友信

## 震災で学んだ

## 多文化共生の意味



長岡市国際交流センター長

平成十六年（二〇〇四年）十月二十三日。長岡は中越大震災に襲われた。

「彼らは無事だろうか?」。激しい揺れに不安を一瞬感じたが、次に私の脳裏をよぎったのはその想いだっ

た。市内約二千二百人の外国籍市民の大半が大地震初体験であることは明らかで、呆然と立ち尽くす彼らの姿が想像できた。

言葉が不自由で正確な情報が伝わらない彼らの、停電による底無しの暗闇や地割れへの恐怖心は、日本人とは比較できない。

すぐに多言語による支援の準備を始めたが、支援者不足の問題が直面した。当時、このような事態に通訳などをお願いできる人材は、ポルトガル語一人、中国語はいなかった。

さらに、地元のボランティアは自身や家族の被災で身動きが取れず、大災害時には、地方都市やその周辺部は支援要員の自己調達が極めて困難であることを痛感した。

## 機能した緊急時の「三角ネット」

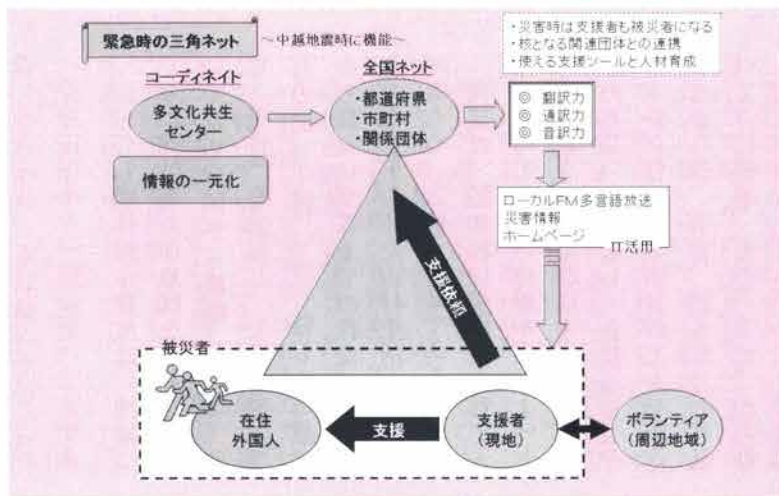
そこで、問題解決のために全国に支援を求めることとした。その際の支援体系などを分かりやすくまとめたものが「緊急時の三角ネット」である。

これは、①被災地にて把握した支援ニーズ等を一元的に整理して伝える（私が統括）、②被災地から離れた場所にいる支援コーディネーターがその情報に有機的に応える人材や物資等を全国の仲間に表示し（神戸の被災経験を待つNPO）、③全国から被災地に整理された支援が届くこ

とを企図したものだ。

このコンセプトによって、支援現場の混乱が最小限に留まり、全国の連携の輪から被災地の外国籍市民へと真に必要なボランティアや多言語表示シートなどが届いた。

また、日本人と外国籍市民が同居する避難所では、些細な行動様式の違いも軋轢となった。災害時は日常の関係性が、良い意味でも悪い意味でも増幅されることを実感し、解決には単なる言語通訳に加え、行動様式の文化的背景などをも理解して関



係改善を働きかける「文化通訳」が重要であることがわかった。

このことから、日常からの顔の見える関係づくりが重要で、そのためには「多文化共生」の考え方を基本に「人が人につながる安心感を中心に据えた地域づくり」が大切であると感じた。

災害時にあっても弱者を社会の枠組みから外さない地域を目指すことは、皆が安心して暮らせる地域をつくることであり、多文化共生の地域づくりにつながると確信した。

## 災害時の外国人支援システム進化を

当時いただいた支援への御礼は、我々の体験を共有してもらい今後の災害時支援システムのあり方を発信することと考え、各地の講演活動などを感謝の思いで続けている。

その成果の一つが、平成十九年七月の中越沖地震での公設・民営支援システムで、全国市町村国際文化研修所の多文化共生マネージャー養成研修修了生中心の組織が即時に有効機能した。

今後も、各地での講演や連携によって災害時外国籍市民支援システムなどを進化させ、多文化共生社会の実現が促進されるよう、様々な情報を発信していきたい。

# 小さなまちの挑戦に大きな役割



株式会社樹一市村酒造場 代表取締役

小布施は葛飾北斎ゆかりの町で、歴史が豊かな町だ。古いものを大事にすると同時に、新しいものにも挑戦する町だ。そんな小布施に私が来たのは、長野冬季オリンピック開催四年前の平成六年のことである。

「長野五輪の役に立ちたい」との思いから前の年に長野市に来ていた私は、初めて小布施の町を見て「これこそ米国にいた時にイメージした日本の町」と直感した。そこで小布施の栗菓子製造と酒造業を営む今の会社に就職し、瞬く間に十五年の時が流れた。

## 桶仕込み酒「白金」の復活

日本酒の工場である酒蔵は木桶がずらりと立ち並んでいるものと思っていれば、すでに半世紀も前からステンレスやホーローのタンクに変わってし

まっている現状を知り、「なぜ金属性の容器に変わったのか」その理由をいろいろの酒屋に聞いてみた。

すると、生産性の向上や大型化による大量生産や微生物管理の精度を上げるということで、均一性という意味での品質アップは狙っても、必ずしも個性的な美味さの追求ではないことに注目した。ここに桶仕込み酒復活の可能性があると思ったからである。

一方、木桶は酒屋が数十年使用しその後、味噌や醤油の醸造に百数十年使用されるという日本独特の循環型経済の一例であることや、それを作る桶職人が高齢化し、また後継者がいないという話も耳にし、平成十二年のミレニアムを記念し桶仕込み酒の復活を実現した。

さらに桶の製作技術伝承のために

も、全国の酒屋に桶仕込みの復活を呼び掛けるとともに、桶を使用する他の産業（味噌・醤油・漬物など）や桶職人、さらに桶文化に興味のある一般の方々にも加わっていただき、「桶仕込み保存会」を立ち上げた。平成十八年と昨年、東京・六本木で開催した桶仕込み保存会の大会は盛況だった。

江戸時代から小布施は客人（来訪者）を大切にしてきた。北斎も一茶も、そして昭和になってからも結核療養所やそのカナダ医師団などと交流し多くの教えと知的刺激を受けてきた町であるし、その交流の場はサロンとなっていた。これを現代版に焼きなおしたのが「小布施ツシヨン」である。毎月ゾロ目の日に開催し、講演の後には講師と聴衆全員が交流の場にも参加するサロンイベントで、すでに九十回開催している。



小布施堂界隈風景



小布施見にマラソン

## 海のない小布施に波を

平成十五年、長野五輪記念マラソンがコース変更となり、小布施はコースから外れることになった。そこで提唱したのが「海のない小布施に波を」のスローガンのもとでのハーフマラソンの開催だった。コースは、普段あまり観光客の訪れない町内の農村集落の生活道路や田んぼや栗・リンゴの畑の中を通る小路や土手やお寺の敷地という極めて特色のあるものにした。

そのうえ「縁走（演奏）」と名付けた、沿道での演奏ボランティア、農家が自分の家の前での果物などの差し入れという、ユニークなハーフマラソンとして「小布施見にマラソン」と名付けているが、人気マラソンとして定着しつつある。第六回の昨年、参加者がそのスタート時に六千人、一万二千本の手で、ウェーブ（波）を作ってくれた。まさに「海のない小布施に波が生まれた」瞬間だった。

# 疲弊した中心市街地を 「観光都市」として再生



社団法人長浜観光協会事務局長

琵琶湖の北東岸に位置する長浜市は、人口八万人余の地方都市である。縄文の時代から人々の営みが連綿と続き、記紀に幾たびも登場する歴史を誇るが、まちの基盤が整えられたのは秀吉の登場による。

長浜で初めて城持ち大名となった秀吉は、城下中心部を免税地にして楽市楽座を導入。さらに町人の合議制による自治都市とした。秀吉の長浜在城は十年足らずで、城下町としての歴史はわずか四十年である。

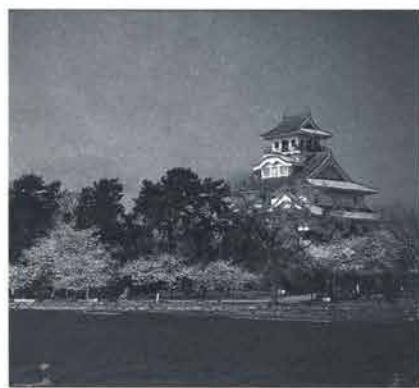
江戸時代に入ると、真宗の拠点である大通寺の門前町、琵琶湖の水運を活かした港町、中山道と北陸路を結ぶ北国街道の宿場町、さらに生糸と縮緬・ビロードの商工業都市として発展し、明治期にはいち早く文明開化を取り入れている。

近代には商業都市としてにぎわっ

た長浜だが、昭和の高度成長の波に乗り遅れた。それどころか、中心市街地は車社会の到来と大規模小売店舗の進出により、その中心性を急速に失っていった。

## 秀吉以来の長浜再生の切り札

冒頭で述べたとおり、秀吉以来の長浜の歴史とそれに培われた独自の薫り高い文化は、中心市街地に集約



長浜城の景観

されている。だから、中心市街地の崩壊は、長浜のアイデンティティ喪失だという危機感を覚えた。

そこで、中心市街地の買い物客をロードサイドショップと取り合いするのではなく、観光客呼び込むことで再生を図ろうと考えた。商業観光の戦略である。

事業は、官民一体となって怒濤の如く推し進めた。ハード事業だけでも長浜城の歴史博物館としての再興、大通寺の門前通り整備、名物建築の保存運動から発展した第三セクター方式による黒壁ガラス館オーブなど枚挙にいとまがない。

イベントも数多い。一月や二月は全国的に閑散期だが、天井に届くほどの梅の巨木を鉢植えにした盆梅展を開催することにより、一年で最もにぎわう季節となっている。同時に郷土料理の鴨スキを盆梅とセットにして売り出しているため、大きな経済効果をもたらしている。

四月には子ども歌舞伎の曳山祭、八月には花火大会、秋には芸術作品のフリーマーケット、着物女性千名が一堂に集う日本一の和装イベント、火縄銃大会を開催している。

## 「草の根活動」が機運高める

こうしたイベントは、企画立案は



日本一の和装イベント

もとより運営や寄付金集めなどすべてが市民団体のボランティアによって進められている。事務局を担当する私としては心強いが、「自分のまちは自分たちでつくるんだ」という市民の熱意には頭が下がるばかりである。

まちづくりの基本は、住民が地域に住まうことに喜び・誇り・自信を持つことだと考えている。そのためには地域の歴史文化、風土などを知ることが何より大切だ。

昭和五十八年、長浜文化塾と題した勉強会を立ち上げ、いち早くボランティアガイド組織を設立した。こうした「草の根活動」が、アメーバのように市民に伝播し、まちづくりの機運を高める力となったのを忘れてはならない。最も住み良いまちが最も素晴らしい観光地、そんな長浜をめざしたい。

# ムラの生命をマチの暮らしに、 マチの活力をムラの生業に



九州のムラへ行こう 編集長・  
九州ムラたび応援団 団長

養父 信夫

現在私の仕事は、雑誌「九州のムラへ行こう」という農山漁村の魅力を都市部に伝える雑誌の編集長であり、また九州のグリーンツーリズム実践者たちのネットワーク組織「九州ムラたび応援団」の団長として、マチとムラの交流によって地域に新たな経済を創出するお手伝いをしていく。

雑誌「九州のムラへ行こう」は一九九五年「九州の村」として、当初九州七県にある六十二村の情報発信を目的として創刊された。その後、「人群れるところすべてムラである」との考えのもと、行政区分上の「村」には拘らず、昔から存在する集落つまり自然村を「ムラ」としてとらえ、一九九八年二月「九州のムラ」として再創刊した。

「九州のムラ」は一貫してマチとムラとの交流＝グリーンツーリズム

を応援し、九州での取り組みを取材し紹介してきた。「ムラの生命（いのち）をマチの暮らしに、マチの活力（ちから）をムラの生業（なりわい）に」というのが、雑誌づくり、地域づくりの基本理念である。

九州のグリーンツーリズムの取材を通じて見えてきたものは、農家民宿、農家レストランなど、まだ地域の点としての取組み段階が中心であり、点と点とが有機的に繋がりが、地域の第六次産業化を進めた、地域全体としての取組みがまだ弱いということであった。

農村物を作る第一次産業従事者、その第一次産物に付加価値をつけて加工する二次サービス事業者、さらには直接消費者に販売したり、サービスを提供する第三次サービス事業者、これら三者が連携し、経済活動をつくっていくことが地域の第六次

産業化である。

これは決して、農家や漁師が第六次産業を目指すことではない。地域の中でそれぞれが役割分担し、地域全体で取り組みことが大切なのである。

そうなるとますます、地域内の三者を繋げる役目、また地域住民と都市住民を繋げる役目、補助事業を振り出す側の行政と繋げる役目など「繋ぎ役」コーディネイターの存在が極めて重要となってくる。そこを担う組織はどこが立ちうるのか、その組織を運営する人材はどうするのか、地域づくりで最後、行き詰ってしまうのは、多くはこの部分である。

## 移住・定住のアドバナーとして

今回、総務省の事業で「地域力創

造アドバナー」として、鹿児島県霧島市の移住・定住のアドバナーとして、そこにつなげるために、交流の仕組みづくりをお手伝いしている。数ある温泉群、鎮守の森、豊かな食材、ローカル線、湧水、天孫降臨や勤皇の志士たちの物語など霧島には豊か過ぎるほどの地域資源がある。

その資源を組み合わせし、マチのニーズを汲み取り、情報発信し、実際に交流の旅に誘う仕組みづくりを、今回、地域住民、行政の方と一緒に組み立ててきた。（詳しくは雑誌24号をご覧あれ）

今後は、更に温泉湯治場を活性化するために近隣の農産加工グループとつなげたり（泊食分離）、都市部の二地域居住のきっかけとなるように湯治部屋を一定期間貸し出したり（シェアハウス）、地域のコミュニティバスを都市住民向けに利用したり（地域の二次交通網）、いくつかの取り組みも行いたい。

あとは、霧島の魅力を都市部につなげるための組織と人材をどう創っていくか。よそからの「風」人が、地域と交わったときに、地域にある宝、光をさらに輝かせ、地域を熾していくのである。

## 発掘・発信 まち全体を博物館に

地域ならではの「宝物」を住民らが再発見・再評価し活用する中で、地域への愛情と誇りを取り戻し、地域や住民に活力を与える。そういった「地域資源の活用」が地域活性化のキーワードとなつて久しい。この地域資源活用法の一つが「エコミュージアム」であり、まち全体を博物館のように考えるものだ。

茨城県北部の常陸太田市にも、この考えから生まれた団体がある。「常陸太田まちかど案内人の会」は地域の魅力をボランティアで訪問者に伝えるガイドたちの団体だ。平成

十二年九月の結成以来、八年にわたるガイド活動を続け、今では年間の案内客は約五千人、通算四万人になるというベテラン団体だ。

設立の端緒は、この地域のまちづくり団体が「まちづくりに大切なのは、携わる人たちが自分たちのまちの魅力に気づくこと」と感じたことだ。この考えが、観光ボランティア養成を通じて、地域住民が地域を知りふるさとに誇りと愛着を持つ人々を育てる事業の市への提案につながった。二十数名の有志が、市が始めた座学や実習を交えた講座に応募。

講座修了後、受講生はこの活動을続けるため自発的に「案内人の会」の結成を発案、「常陸太田まちかど案内人の会」を立ち上げた。市の講座はその後三年間続けられ、現在は、四十歳〜七十歳代のメンバー四十数人によって支えられている。

実際に活躍するメインステージは、水戸黄門諸国漫遊の旅のスタート地点でもおなじみの「西山荘」だ。メンバーを四班に分け、会員相互で決めた「コーディネート」に対してガイドの予約が入ると、コーディネートから輪番の班長に対して予約概要を説明し、案内人の派遣を要請する。梅の花の季節や、新緑、紅葉の季節には、西山荘近くの事務所

に数名で詰めてその場の依頼にも応じている。案内人の存在は口コミで広がり、今では観光エージェンツからも多くの要請がある。

観光スポットだけでなく、常陸太田市のありのままの魅力を伝えよう



常陸太田案内人の会の青木氏西山荘にて

と、二つの案内コースも設定した。一つは、平安時代末期から470年に渡りこの地を拠点とした豪族の史跡にちなんで「佐竹氏コース」。佐竹氏は江戸時代には秋田に移封されたことから、秋田県からルーツ探しに来る観光客にも好評で、リピーターも現れるなど、地域間交流にも一役買っている。

もう一つが、北関東の商業集積地として栄えた「鯨ヶ丘のまちコース」。市の中心部、遠くから眺めると鯨のように見える丘の上の一角は、日本武尊の東方遠征にまでさかのぼるともいわれ、佐竹氏がこの地を拠点としたころには既に繁栄していた歴史ある地域である。関ヶ原の戦いの年に創業した薬局や、県内有数の営業年数を誇る宿屋などが今でも営業を続けている。太田七坂といわれるそれぞれ由緒ある坂道を登ると、蔵と店

## ★団体プロフィール★

## 鯨ヶ丘倶楽部

設立年＝平成8年3月  
設立・運営団体＝自主的組織  
代表者＝藤田 謙二  
＜事務局連絡先＞  
〒313-0052  
常陸太田市東二町 2229-1  
(0294) 72-7878  
(西野商事内)

## ★団体プロフィール★

## 常陸太田まちかど案内人の会

設立年＝平成12年9月  
設立・運営団体＝自主的組織  
代表者＝青木 忠  
＜事務局連絡先＞  
〒313-0015  
常陸太田市木崎一町 737-1  
Tel&Fax (0294) 72-3745  
＜案内人予約＞  
Tel (0294) 74-3302  
Fax (0294) 74-3302 (豊田)



情緒あふれる鯨ヶ丘の蔵のまちなみ

を融合させた店蔵が点在し、「蔵と坂の町」といった情緒あふれる一帯だ。

地域住民の暮らしがそのまま博物館になる「エコミュージアム」にぴったりのこの鯨ヶ丘にも、空き地や空き店舗が目立ち始めた。これに対し、この地域として活性化させようと取り組んでいるのが「鯨ヶ丘倶楽部」である。

もとは、商店会とともに地域の祭を手伝う有志のサロンのような集まりとして活動。祭を盛り上げるため、子どもたちが楽しむことができる仕掛けを模索し、ヒップホップダンスの導入にたどり着いた。古くは「久自」ともいわれていたこの地域にちなみ「久自楽舞」と名づけられたダンスは、いまでは地域の小中学生を

中心に十八チーム、五百人が活動。二歳から七十歳までが楽しみ、祭りで踊ることを目標にしている。

しかし、舞が活発になっても、市内に練習するスペースもないままでは、結局、地域に根付かないと危惧した鯨ヶ丘倶楽部が目をつけたのが、十年以上前に閉店したかつてのデパートの空き店舗だった。オーナーと交渉すると「言うだけではなくやってみなさい。家賃などは気にしないで」との返答。これに発奮したメンバーは、県の平成十九年度「がんばる商店街活性化支援事業」に応募、プレゼンテーションで見事グラントを勝ち取った。

ところが、空き店舗はまさに廃墟状態。鯨ヶ丘倶楽部は廃校となり、取り壊していた中学校から、蛍光灯やトイレなどの資材を譲り受け、完全なボランティアで毎日夜なべの改築作業に従事。地域の大手や市職員も加わって数カ月をかけ、若者向けカフェを併設したダンススタジオ「ボーンズ」が完成した。オープン以来平日の夜は予約が一杯。子どもたちがダンスに励み、祭や様々な自主イベントにも活用され、地域の文化の発信拠点となっている。また、カフェには遠方からも驚くほど多くの若者が集まるといふ。



ダンススタジオ前にて鯨ヶ丘倶楽部代表の藤田、西野両氏

他にも、地域の有志が空き店舗を活用。昔ながらの街並みを残したまま、鯨形のタイ焼き「くじらやき」の店を皮切りに、学童保育を併設した駄菓子屋、センスのいい喫茶店やバーなどを次々と出店。三年程前にオープンした有名フレンチレストランの二号店も賑わい、鯨ヶ丘は新たな展開をみせている。

鯨ヶ丘倶楽部の仕掛け人の一人である藤田さんは、高校生がはつらつと小学生にダンスを教えている姿を見ながらこう言う。「昔、私が祭の準備にかかりきりで家族サービスができないことを内心不満に思っていた娘が、祭にダンスを導入したら夢中になって踊るようになった。もともこの建物は、そして鯨ヶ丘は、むかし子どもだったいまの大人たちにとってあこがれの思い出深い場所。

このまちを今のこどもたちにとっても、魅力ある、思い出のまちにすることで、鯨ヶ丘が商店街としてだけでなく、地域として次の世代に継承されていくことにつながると思う」。

鯨ヶ丘倶楽部では、ダンススタジオ運営以外の活動も展開している。スタジオに新たに観光のための拠点も併設することも考えているようだ。また、まちかど案内人の会も活動エリアを市全域に広げつつ、案内人養成講座の復活や、小中学生案内人の養成を考え始めている。地域の子どもたちが他の地域からやってくる子どもたちに誇りを持って自分たちの地域を案内する。そのための拠点が地域の文化発信地に併設され、ともに地域の魅力を高めていく。ガイドとまちづくり、二つの活動がどのように連携していくのか、そして、それをどうやって地域に、また全国に発信していくのか。

エコミュージアムという考え方を活かそうと、市はまちづくりの最高指針である総合計画において、「エコミュージアム活動によるまちづくり」を基本路線に位置づけた。コーディネートとして、行政の手腕にも大きな期待がかかっている。

編集委員 ● 大井武幸

# 高知のアツさを学んだ 感動の3日間



小田切セミ 石川県加賀市 ● 南出寛人

小田切徳美主任講師（明治大学教授）の指導のもと、塾生八名は平成二十年十一月四日から三日間、高知県内を視察研修した。  
（研修交流課）

最初の現地調査先は津野町社会福祉協議会。「津野町安心・安全ネットワーク」の取り組みについて、誰もが安心・安全で災害にも強いまちづくりを実現するため、住民主体による「見守り台帳」、「お守りカード」、「五日マップ」などを活用した安心・安全ネットワークづくりを学んだ。

その後、宿泊先でもある同町の森の巣箱運営委員会にて「廃校を活用した地域コミュニティの再生に向けた取り組み」について調査した。地域消滅の危機を感じた有志が行政に相談することからはじまった地域再生の取り組みが、集落

コンビニや食堂兼居酒屋など地域交流の場となり、地域に連帯感が生まれた先進事例であった。夕方からの交流も有意義となったことは言うまでもなく、家族同様に迎えていただき大変感謝している。

二日目は全国的にも有名な四万十町の（株）四万十ドラマにて「地元発着型産業！」をテーマに視察した。1億円コミュニティビジネスをいくつも成功させた畦地氏から具体的事例について紹介があり、込み上げるような情熱に圧倒された。

その後、同町の十和とおわおかみさん市にて「まちよつたらいかん。あ

たしらあ打ってでるき！」といった攻めの姿勢で、「おでかけ台所」、「おもてなしメニュー」、「おもてなしツアー」など、打って出る取り組みが成功している事例を学んだ。四万十川の悠々と流れるほとり、その冷涼感とは全く異なる熱いものを感じることができ大変感動した。

午後からは中土佐町の企画・ど久礼もん企業組合にて「地域資源「かつお」をいかした新たな産業づくり」について視察した。鯉こまるごとプロジェクトを仕掛け、後

世に伝えるべき産業について、行政が支援側に徹する民間主導型で成功している取り組みである。質実剛健な漁師気風に加え、この現地調査の活動模様が即日ブログに掲載されるなど、情報化社会にもしっかりと対応している俊敏性も非常に印象的だった。

最終日は日高村のNPO法人日高わのわ会にて「ノーマライゼーションの実現に向けた地域での取り組み」について視察した。歳をとっても、障害を持っても、その人らしく当たり前に暮らすため、できる人ができることからする理念で進めてきたNPOの取り組みを学んだ。

ここで、これらの効果を上げるために欠かせないのが、高知県政策企画部が行っている地域への支援員派遣制度である。危機感を持った地域のキーパーソンが行政との強いパートナーシップを発揮し、その地域の誇りがものの見事に再生されている状況があった。「恐るべし高知県！」（小田切先生談）今後、私たちもこの事例を活かし、地域の誇りを醸成していきたいと思う。



津野町 森の巣箱にて

# 熱い想いもつ4人の リーダーとの出会い



山下ゼミ 埼玉県加須市

● 今村伊知朗

山下茂主任講師（明治大学大学院教授）のもと、塾生八人は平成二十年十一月十七日から三日間、鹿児島県鹿屋市、伊佐市、熊本県人吉市、水俣市を訪れ、先駆的地域づくりの現場に触れ、ふるさとへの熱き想いを肌で学んだ。

（研修交流課）

行政に頼らない「むら」おこし

「やねだん」のカリスマ町内会長

鹿屋市柳谷地区では、平成八年に現町内会長である豊重氏が自治公民館長に就任したのを機に、「集落でできる最低限のことは集落独自で汗して行う」を実践している。

集落の活動の拠点となる公園の整備から始まり、カライモ栽培、土着菌やPB焼酎「やねだん」の製造・販売などに取り組んだ。これらは今では、年間売上高七百万円、収益二百万円を生み、緊急警報装置の設置、寺子屋の開設、全世帯に一万円のボーナス支給といった形で地域に還元されている。

活動が長く継続されているのは、

豊重会長の強いリーダーシップもさることながら、住民一人ひとりが社会貢献の場を得て、しかも成果が目に見えていることだと考えられる。

次世代を育てるレストラン

「ひまわり亭オーナー」

人吉市での地域の主婦二十名による、高齢者への声かけを兼ねての配食ボランティアが活動の始まりである。その後、仲良しグループからの脱却を図るために自ら出資し、平成十年に「郷土の家庭料理 ひまわり亭」をオープンした。

「もったいない」を運営のキーワードとして、生涯現役を掲げた農家の女性たちが主婦として培った知恵や経験を生かしている。また、食材調

達を通じて農家の安定収入にも貢献、幼稚園の給食を通じ若い主婦や子どもへの食育にまでその活動の影響は及んでいる。

本田オーナーをこの活動へと駆り立てるもの、それは「地域と人への深い愛」であると感じた。

久木野の森と棚田を守る

「愛林の星」愛林館館長

水俣市久木野ふるさとセンター「愛林館」では、ここを拠点として、全国公募により選ばれた沢畑館長を中心に、「過去二千年と同様、今後二千年この地に人が暮らし、棚田と森を守っていく」ことを目的として、「エコロジー（風土・循環・自立）に基づくむらおこし」をテーマに掲げ活動している。

身土不二を目指した食べ物作り、

ボランティアによる水源の森づくり、棚田保全などの特色ある事業を展開している。また、環境教育にも取り組み、森林の公益的機能も積極的にPRしている。沢畑館長の胸の内には「この地域をよくしたい」という熱い想いが秘められていた。

「伊佐の焼酎豚」の開発

伊佐の熱血公務員

伊佐市（旧大口市）は「焼酎発祥の

地」と言われる有名な芋焼酎の産地であり、「伊佐の黒豚」の産地としても知られるが、これらの特産品を利用した産業振興は行われてこなかった。地域振興課風土ビジネス係長（当時）橋本氏は「地域の素材を見直して活用すれば本当の産業振興につながる」と考えた。さらに、地域の外からの目の必要性を感じ、アドバイザーにNPO法人結まいるプラス理事長かわべまゆみ氏を迎え、地元の主婦二人が原動力となり、黒豚を焼酎で煮た「伊佐の焼酎豚」が開発された。

商品化に向けて、伊佐のためにならと、成松秀子氏が手を上げ、かわべ氏、橋本氏と共に新「焼酎豚」の開発への挑戦が始まった。その結果、「電気のあるさとじまん市」における大賞受賞となった。

「『前例がない、予算がない』は行政の言い訳」「内部の抵抗勢力に負けるな」などと話す橋本氏からは、黒子・営業マンとしてこの商品開発に情熱を注いできた想いが伝わる。

熱き四人のリーダーとの出会いは、塾生にとって非常に意義があった。この経験を生かすのも無駄にするのも私たち次第である。のど元過ぎれば…にするつもりはない。

# 歴史・文化・ひとの力を 感じたまちづくり



後藤ゼミ 千葉県匝瑳市 ● 鈴木美穂

後藤春彦主任講師（早稲田大学教授）のもと、平成二十年十一月二十一日から二十三日、新潟県十日町市、柏崎市、長野県長野市、野沢温泉村、小布施町を訪れ、現地調査を行った。（研修交流課）

## まつだい雪国農耕文化村センター

### 「農舞台」

十日町市の「農舞台」は田んぼの中に建つ芸術活動施設で、地域づくりの拠点でもある。アートを活用したまちづくりについて①どれだけ雇用ができるか②地域のお年寄りが元氣かの二点を成功の指標としているとのこと。施設内のレストランが雇用の場となり元氣に接客をする様子を見ることができた。

また行政側から、大地の芸術祭の公共事業としての正当性と有効性についての話をうかがった。公共事業として実施する責任を深く考えさせられた。

## 高柳町・萩ノ島かやぶきの里

柏崎市高柳町の茅葺きの環状集落において、じよんのびのまちづくりに触れた。歴史・自然・風土等の地域資源が重要な要素であり、そこから離れてしまうと長く続くまちづくりはできない。持続には風土に基づいて活性化を図ることが大事なので、職員の間でも歴史や風土の勉強をしているという。地域に対する愛情の深さと努力に感動した。

### （株）まちづくり長野

長野市の中心市街地活性化について、大型店撤退による空店舗を公共複合施設「もんぜんぶら座」として再生させた事業や、善光寺門前に蔵の風景を再生させた「ぱていお大

門」の事業等の取り組みについてうかがった。善光寺門前町の伝統と歴史を活かすと同時に、「訪れたいくなるまち、住みたいくなるまち、歩きたいなるまち」をテーマに新しいまちづくりをされていた。

### 地縁団体法人野沢組

野沢温泉村には「野沢組」という住民に身近な組織があり、温泉、林野、水利等の管理を行っている。組織は惣代一人、副惣代二人と各種委員会があり、七百五十戸で構成されている。選挙によって選ばれた惣代と副惣代は任期中の一年間、有償で事務所に詰めることとされ、また三百五十年前から保管されている文書を読み、歴史について学ぶ。



長野市松代城跡にて

今でも続くこのあり方に、どこか異国へ来たような感覚を味わった。

### 枳一市村酒造場・小布施堂

小布施のまちには古い建物が並んでいた。建物の配置は曳き家によって昔と変わっているが、外観は昔のままである。新しいものをつくったほうが安いという声もあったが、壊してしまつては将来価値のあるまちにはならない。まちづくりは今だけのものではなく、過去を受け継ぎ、未来へ渡すものなのだということを教えられた。

### NPO法人夢空間松代のまちと心を育てる会

NPO夢空間松代は、地域住民主体で歴史的建造物の保存再生やまちなかを歩く企画などに取り組んでいる。「お庭拝見」という企画では県内各地から三百人もの見学者が訪れ、松代の良さが外から評価された。それにより住民は、地域資源の価値に自信を持つようになったそうだ。外からの評価は住民のやる気向上のために効果的と再認識した。研修を通して、地域の歴史・文化を学び続けている姿勢と、その気候風土と共に生きている姿に心を打たれた。



## 「藤堂高虎公」 歴史と文化に学ぶまちづくり

津市長 ● 松田 直久

「ご存じのとおり「津」は、日本で一番短い市名として知られる、三重県の県庁所在地都市です。

本市の市名である津の意味は港に由来し、古く中世の時代には日本三津の一つとして安濃津（あのとつ）と呼ばれ、大陸にもその名を知られた港町でありました。ちなみに、日本三津とは、伊勢の安濃津「あのとつ」、三重津市「薩摩の坊津」ほうのつ、鹿児島南さつま市「筑前の花旭塔津」はかたのつ、福岡県福岡市」です。

安濃津は、海外との交易をなす海の要衝地であったと同時に、伊勢へと向かう参宮街道の要衝地でもあり、様々な古文書をひもとくと、往時、大変なぎわいを呈した交易都市と推定され、海の道と陸の道が交わる伊勢湾の重要な拠点であったと思われます。

しかしながら、明応七年（一四九八年）に発生したマグニチュード8を超える大地震によって、安濃津の港は壊滅的な被害を受け、港湾機能を失い衰退していくこととなります。

くしくも明応の大地震から約五百年の時を越え、平成十七年二月、本市と中部国際空港を結ぶ港「津なぎさまち」が開港し、三重の海の玄関口として、これまで百四十五万人を超える皆様に利用されています。

近世には、戦国時代から江戸時代初期にかけて活躍した近世の武将・藤堂高虎公が津に入府され、現在の津の原型が築かれていくこととなります。

平成十八年一月、本市は十の津地区広域市町村が合併し、七百十平方キロメートルという琵琶湖より一回り大きな市域を有することとなりましたが、現在の市域と藤堂藩が伊勢の国で治めた領地がほぼ重なり合い、津のまちづくりを担わせていただく私にとっても、歴史の偶然性を感じずにはいられません。

津といえば、藤堂三十二万石の城下町であると同時に、「伊勢は津でもつ津は伊勢で持つ」とそのにぎわいを伊勢音頭に謡われたように、藤堂藩によって町並みが整備され、伊勢神宮へと向かう参宮客がひきまきらない宿場町としても大きな

発展を遂げてきました。その陰には、高虎公の大変な労苦があったと推察します。

今を去る四百年の昔、「津」に入府され、戦乱で荒廃したわが街を初めて見た時の高虎公の思いはどのようなものであったのでしょうか。まさにゼロからの出発、その情熱の結果は希望と活力あふれた現代の私たちのまち「津市」の姿そのものです。「日本一の城下町」の整備を目ざし高虎公が不屈の情熱をもって進めた新しいまちづくり、その主軸に置かれたことは何よりも「住民の目線」で考えることであつたと思います。

街道の整備や町並みの整理など、高虎公の計画的なまちづくりには、現代の都市計画においても、技術的に学ぶべき点が多々あります。しかし、何よりも学ばなければならないことは、高虎公の「まちを愛する思い」です。激動する世の中、移り変わる世の中ですが、歴史の中からまちづくりの本質を学び、市民の皆さんとともに、現代にふさわしいまちづくりを考えていかなければならないと思います。

昨年は、高虎公が津に入府して四百年という記念の年に当たりましたが、この記念の年に新市誕生後初となる津市総合計画をまとめ、本格的なまちづくりをスタートさせると同時に、市の一体感の醸成や、全国への情報発信を主眼として「藤堂高虎公入府四百年記念事業」を開催しています。

記念事業である高虎楽座や四百人茶会、新能、津まつり、街道ウォーキング、特別展覧会、さらには東京イベントや市民の皆様による数々の自主事業など、多彩な催しを展開し、延べ約九十万人を超える皆さまに参加いただきました。

本事業をきっかけとして、歴史を通じて市民参加のまちづくりを一層進め、「元氣な津市づくり」につなげるとともに、全国に津市を積極的にPRするシティプロモーションの取り組みを進めていきます。港町であり、城下町であり、宿場町である津市。歴史と文化とロマンあふれる津市にぜひ一度、お立ち寄りください。

## 明石ダコ

明石の民だ。明石海峡の廣い瀬道にもまれ、海老や蟹など豊富な餌を食べて育った。身は白く太くとろろいのが特徴。明石ダコを使った明石焼き（玉子焼）は、地元の名物。



## 宝塚歌劇

宝塚だけで盛り上げる華やかな舞台で、観客を魅了し続ける宝塚歌劇。多岐なレパートリーとタリタリの音楽が、その人気を支えている。



## 風見鶏の館

ドイツ人貿易商トーマス氏の邸宅で、国指定重要文化財。明治42年に建築された。塔上の風見鶏と赤レンガの建築が特徴。



## ひょうご観光大使 はばタン

フェニックス（不死鳥）をモチーフにした兵庫県マスコット。平成18年11月からD・J・うご観光大使として、兵庫県観光の魅力を県内外でアピール。



ほんものは兵庫にあります

# Hyogo

あなたに会いたい

## 丹波焼

焼酎は平安時代末期から鎌倉時代のはじめといわれる日本六古酒の一つ。篠山市今田町には、60近くの窯元があり、兵庫陶芸美術館や立花陶の館では丹波焼の陶器体験ができる。



## 灘五郷

神戸市から西宮市に広がる灘五郷は、日本一の酒どころ。酒の醸造の工程や道具を紹介したり、試飲コーナーや販売所を設けた博物館や資料館もある。



## コウノトリ

兵庫県の鳥で、国の特別天然記念物。兵庫県立コウノトリの郷公園では、約100羽のコウノトリを飼育。コウノトリが野生復帰できる環境づくりに向け、地域ぐるみで取り組んでいる。



## 世界最大公開望遠鏡「なゆた」

一般公開用としては世界最大口径2mで、また、国内で最大口径、近郊町の兵庫縣立西はり天文台公園にあり、宿泊施設を備え、観望、観望会に参加できる。



## 城崎温泉

門山川の支流、大瀬川沿いに広がる温泉街。1,300年もの歴史を誇り、お所ある新緑園地も魅力の一つ。又人たちに愛された温泉地で、志賀直哉の小説「城崎の湯」の舞台としても有名。



## 明石海峡大橋

明石海峡を横断し本州と淡路島を結ぶ全長3,911mの世界最長の吊り橋。パースブリッジの愛称をもち、夜間ライトアップでは、幻想的な景観が楽しめる。



あなたに会いたい

兵庫

あいたい兵庫

デスティネーションキャンペーン

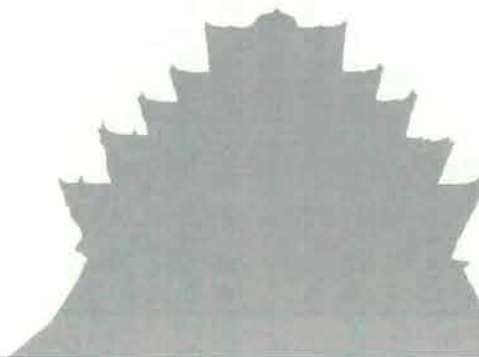
平成21年4月～6月開催

兵庫県大型観光交流キャンペーン推進協議会



## 姫路城

国宝であり、世界文化遺産にも登録されている。堀の天守閣は、約400年もの歴史。14年に完成。5層の天守と3つの小天守が並び、威風凛々な姿は白鷺にも例えられる。



手前みそ  
ですが…

熊本県

天草市

122

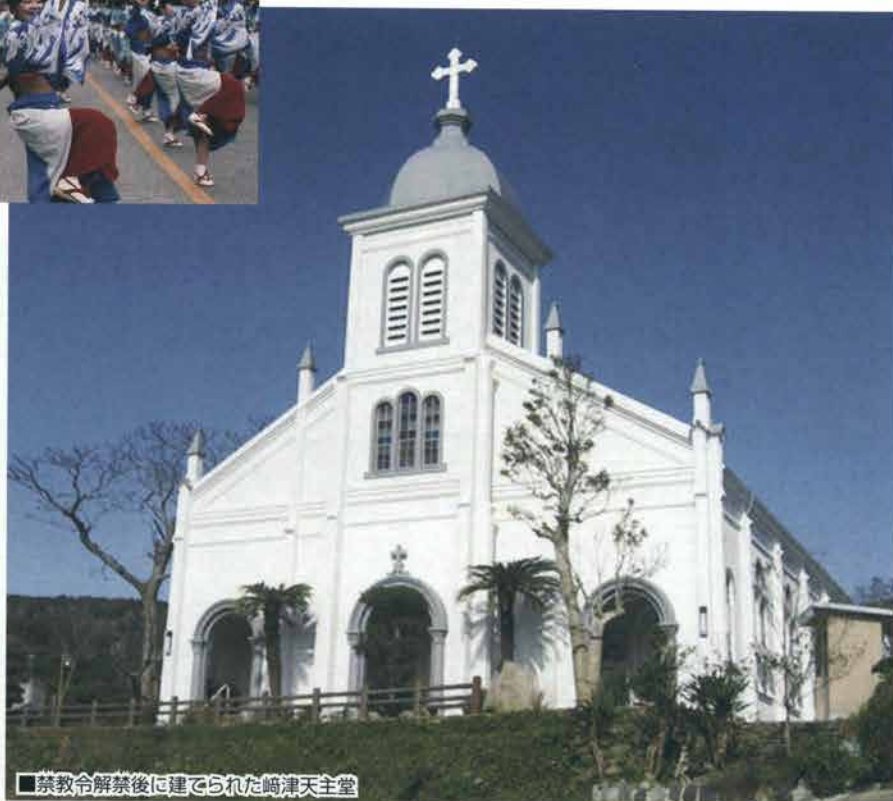


■牛深ハイヤ

# “天草”は日本の宝島



■大江天主堂



■禁教令解禁後に建てられた崎津天主堂



■イルカウォッチング

**天** 草四郎やキリシタンで知られる「天草」。天草市は、東シナ海・有明海・八代海（不知火海）の3つの海に囲まれた熊本県の南西部にある天草諸島内の2市8町が合併し、平成18年3月27日に誕生した。人口は約95,000人。面積は約683 km<sup>2</sup>で県下最大を誇る。

藍より青い海と変化に富んだリアス式海岸とが織り成す「雄大な景観」をはじめ、天草コレジヨ（大神学校）や日本初の活版印刷などに代表される「キリシタン文化・南蛮文化」、国内最大級の肉食恐竜の化石が発見された「恐竜の島」、国の伝統的工芸品にも指定されている「天草陶磁器」など見所満載。また、見る人の心をいやす「イルカウォッチング」や恐竜の島での「化石発掘」など、天草ならではの体験も楽しめる。

阿波踊りや佐渡おけさなど、全国各地に広まったハイヤ節系統の民謡の源流といわれる“牛深ハイヤ”。毎年4月に行われる「牛深ハイヤ祭り」では、軽快なハイヤのリズムに乗って老若男女が街中を踊り歩き、大変な盛り上がりを見せる。



■天草国際トライアスロン大会  
オリンピック競技距離51.5kmのトライアスロンレースを日本で初めて実施した大会



■夏の風物詩「干しダコ」



■国の天然記念物及び名勝「妙見浦」

## スポーツ拠点づくり推進事業 3月の承認スポーツ大会開催のお知らせ

「スポーツ拠点づくり推進事業」は、小・中・高校生が参加する各種スポーツの拠点を全国各地につくことで、「スポーツの振興」と「地域の再生」を進める事業です。財団法人地域活性化センターでは、2005年度から、「あこがれの拠点づくり」と大会開催をきっかけにした「地域の活性化」に向けて、それぞれの地域の特性を活かした取り組みを行っている市区町村に助成支援を行っています。

お近くの方はぜひ会場へ！小中高校生の熱戦をご観戦ください。

|     |       |                                                 |             |
|-----|-------|-------------------------------------------------|-------------|
| 新潟県 | 妙高市   | 全日本ジュニアスキー選手権大会兼全日本中学生選抜スキー大会（ノルディック種目）         | 3/11 ~ 3/14 |
| 石川県 | 能美市   | 全日本競歩能美大会                                       | 3/15        |
| 北海道 | 富良野市  | 全国高等学校選抜スキー大会（アルペン種目）                           | 3/19 ~ 3/22 |
| 静岡県 | 富士宮市  | 全国高等学校男子ソフトボール選抜大会                              | 3/19 ~ 3/23 |
| 静岡県 | 浜松市   | 全国高等学校選抜ボート大会                                   | 3/20 ~ 3/22 |
| 兵庫県 | 伊丹市   | 全国高等学校なぎなた選抜大会                                  | 3/21 ~ 3/22 |
| 埼玉県 | さいたま市 | 全日本選抜高等学校パワーリフティング選手権大会兼全日本サブジュニアパワーリフティング選手権大会 | 3/22        |
| 富山県 | 氷見市   | 春の全国中学生ハンドボール選手権大会                              | 3/25 ~ 3/29 |
| 北海道 | 釧路市   | 全日本少年アイスホッケー大会（中学生・男子の部）                        | 3/25 ~ 3/29 |
| 茨城県 | 大洗町   | 全国体操小学生大会                                       | 3/26 ~ 3/28 |
| 三重県 | 伊勢市   | 都道府県対抗全日本中学生ソフトテニス大会                            | 3/26 ~ 3/28 |
| 石川県 | 金沢市   | 全国高等学校ウェイトリフティング競技選抜大会                          | 3/26 ~ 3/29 |
| 長野県 | 軽井沢町  | 風越カップ全日本少年アイスホッケー大会（小学生の部）                      | 3/26 ~ 3/29 |
| 北海道 | 北広島市  | 文部科学大臣旗争奪はまなす杯全国中学生空手道選抜大会                      | 3/27 ~ 3/29 |
| 福井県 | 美浜町   | 全国中学校選抜ボート大会                                    | 3/28 ~ 3/30 |
| 千葉県 | 白子町   | 全国小学生ソフトテニス大会                                   | 3/29 ~ 3/31 |

大会に関する詳しい内容、その他スポーツ拠点づくり推進事業に関するお問い合わせ先  
 情報サービス課 TEL 03-5202-6135 FAX 03-5202-0755

## センター刊行物の紹介

「地域活性化」に有益な情報を満載、ぜひご活用ください。

### 平成20年度 地域活性化ガイドブック 「地域コミュニティの再生」

総人口の減少といった大きな社会の変化を迎える中、少子高齢化の進行、国・地方財政の悪化、地方分権による地方への権限委譲の動き、市民協働の活発化など我々を取りまく社会も変化しております。このような状況から、住民自治による地域づくりの期待が急速に高まり、地域住民が自らの地域社会のあり方を具体的に考え、住民生活の視点から地域の課題を解決していくための基盤組織づくり、いわゆる住民自治組織の基礎となる地域コミュニティの再生が求められております。

このガイドブックでは、「政策解説」として地域コミュニティの再生にかかる省庁の政策を、「特集編」として個性豊かに取り組んでいる全国の先駆的・特徴的事例を紹介しています。また、「資料編」として省庁の助成事業一覧を掲載しています。

- 価格500円（税込・送料別）
- お問い合わせ先  
総務部総務課  
TEL 03-5202-6132



### 平成20年度 地域活性化事例集 「大学との連携による地域の活性化」

近年、地方公共団体では、地域の活性化のため大学の高等教育機関と連携し、様々な事業を展開するようになっていきます。今ではその内容も高度化、複雑化し、産業の分野はもちろんのこと、まちづくり、環境保全、福祉、観光などの分野でも積極的に大学等と連携していく事例が増えています。また、雇用創出が期待できる大学初のベンチャー企業への支援を強化する地方公共団体も見られるようになりました。

この事例集では、地方公共団体の皆様のご協力により、地方公共団体と大学等が連携して、特に地域の活性化に取り組んでいる214事例について、その事例に取り組んだ背景、立ち上げの経過、取り組みの内容とその効果、地方公共団体と大学等との役割分担、今後の方針や課題の5点を中心で紹介しています。

- 価格2,000円（税込・送料別）
- お問い合わせ先  
総務部総務課  
TEL 03-5202-6132



## 3月

## ★日本橋プラザビルイベントスペース

- 3月5日～6日  
財名古屋観光コンベンションビューロー（愛知県）
- 3月9日～11日  
宇土市（熊本県）
- 3月18日～19日  
長野市の観光と物産展実行委員会（長野県）

## ★有楽町ふるさと情報プラザ

- 3月2日（月）  
藤岡町（栃木県）  
『ハートにアクセス～人と自然が  
出会う町～藤岡町』
- 3月3日（火）～6日（金）  
群馬県  
『銀河鉄道999号に乗って富岡  
製糸場と西上州の桜を観にいこ  
う!』
- 3月9日（月）～13日（金）  
横浜市『横浜開港150年に贈  
る横浜ブランド』
- 3月16日（月）～19日（木）  
笠間市（茨城県）  
『茨城県笠間PRと物産市』
- 3月23日（月）～27日（金）  
下妻市（茨城県）『花のまちしも  
つま～下妻花特集!～』



## 4月

## ★有楽町ふるさと情報プラザ

- 4月1日（水）～3日（金）  
新潟県南魚沼市  
『南魚沼市観光PR展』（仮題）
- 4月6日（月）～10日（金）  
長野県諏訪市  
『諏訪市観光PR展』
- 4月13日（月）～17日（金）  
富山県黒部市  
『黒部市観光PR展』（仮題）
- 4月20日（月）～24日（金）  
長野県長野市  
『長野市観光PR展』（仮題）
- 4月27日（月）～28日（火）  
三重県津市  
『津市観光PR展』（仮題）

## (写真)

- 1 1月7日～9日 米沢市（山形県）
- 2 1月20日～21日 結城市（茨城県）
- 3 1月29日～30日 中山町（山形県）
- 4 1月22日～23日 あわら市（福井県）
- 5 1月26日～30日 栃木県



## 【編集後記】

▼世界各地で吹き荒れる不況風は、日本にも大きな打撃を与えています。企業の業績悪化や株価下落、リストラの動きなどで、雇用情勢も悪化の一途です。そんな中でも、たくましく「頑張る地方」は健在のようです。

▼三月号の特集は、こうした熱意あふれる地方の活動を表彰した「平成二十年度地域づくり総務大臣表彰」です。地域をより良くしようとする取り組みに尽力してこられた二十五団体、四組五人に活動内容を執筆いただき、紹介しました。

▼いずれも、地域の個性豊かな発想の基で、先進性や独自性を発揮し、魅力あふれる地域づくりに功績を示しています。中には、テレビや新聞などで既に報じられ、全国的にも有名な事例もあります。他の団体にも参考になるのではないのでしょうか。

▼「地方が元気になれば、日本も元気になる」といわれますが、逆風下の中ではそれも容易ならざること。「地域力」を高める努力とともに、地域づくりへの熱意が萎えてしまわぬよう踏ん張る、忍耐力が必要かもしれません。

(原田)

【3月号予告】  
特集Ⅱ「地産地消」（仮称）

〈訂正〉1月号の本文19ページ・コラム欄で、西伊豆町について「花と潮騒の里」の表記を削除します。合併前に使用していたものでした。

## 地域づくり3月号

2009年3月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131（代） <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社サンワ

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。情報サービス課（03-5202-6135）まで、ご連絡下さい。

# その想い、忘れないでと応援します。

ただ、ただ純粋に  
なにかを追い求める心。  
大きな夢を抱いて、その夢を自ら  
つかもうとする気持ち。  
宝くじは、可能性いっぱいのあなたに  
ずっとそばで応えられる  
存在でありたいと思っています。



宝くじの収益金は、  
身近な街づくりに役立っています。



財団法人 **日本宝くじ協会**

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

<http://www.jla-takarakuji.or.jp>